

大賞

「姉妹」 カルダモン咲

優秀賞

「奇妙なティータイム」 リサリサのせきせき

「おさむじやない」 岸 燃料

「らせん階段のカンダタさん」 南藻 ナイ

第12回熊本大学

東光原文学賞作品集



2020年3月発行
熊本大学附属図書館
Kumamoto University Library

第十二回 熊本大学東光原文学賞作品集

第十二回熊本大学東光原文学賞作品集 目次

館長のことば

熊本大学附属図書館長 山田 秀／4

第十二回熊本大学東光原文学賞作品集の公刊に寄せて

大賞

姉妹

カルダモン咲／9

(文学部総合人間学科四年)

優秀賞

奇妙なティータイム

リサリサのせきせき／30

(文学部総合人間学科四年)

優秀賞

おさむじやない

岸 燃料 / 55

(法学部法学科四年)

優秀賞

らせん階段のカンダタさん

南藻 ナイ / 90

(理学部理学科二年)

選考を終えて

跡上 史郎 「東光原文学賞総評」 / 119

永尾 悟 「講評 まだ見ぬ自己に出会うこと」 / 122

岩瀬 茂美 「講評 現実の世界が深くなる」 / 125

第十二回熊本大学東光原文学賞作品集の

公刊に寄せて

附属図書館長 山田 秀

熊本大学附属図書館は、本年度（すなわち平成三十一年度および令和元年度）の重要事業の一つとして、「東光原文学賞」の作品を募集いたしました。厳正な審査をおこない応募作品のうちから優秀賞三篇と大賞一篇を選考し、その結果を公表しました。本冊子は、その受賞作品四篇を上梓して広く学内外の読者に供するためのものです。

本事業の趣旨眼目は、当然のことながら、先ずは学生諸君の読書への関心を喚起すること、日本語の表現能力の向上に資すること、これを好機として学生諸君が図書館を身近に感じてより一層活用していただくこと、こうしたところに置かれます。

以上の趣旨で小説作品の投稿を募ったところ、本年度は、応募締め切り日の十一月十六日まで、に幸いにも十五篇の作品を受理しました。その内訳を見ると、

文学部（一年二篇、四年三篇）、法学部（二年二篇、四年二篇）、理学部（二年一篇、三年一篇）、薬学部（二年一篇、三年一篇）、医学部（六年一篇）、社会文化教育部（一年一篇）となっていま

す。『第八回熊本大学東光原文学賞作品集』の山尾敏孝館長の巻頭言に做って参考までに、これまでの投稿状況を記しておきます。

- 第一回…二十九篇(学部二十一篇・六学部、大学院八篇・五研究科) 大賞一、優秀賞二
第二回…二十篇(学部十九篇・五学部、大学院一篇・一研究科) 大賞一、優秀賞三
第三回…二十五篇(学部二十三篇・六学部、大学院二篇・二研究科) 大賞一、優秀賞三
第四回…二十一篇(学部十九篇・六学部、大学院二篇・一研究科) 大賞一、優秀賞三
第五回…十四篇(学部十四篇・五学部、大学院一篇・一研究科) 大賞一、優秀賞三
第六回…十九篇(学部十九篇・七学部、大学院なし) 大賞一、優秀賞四
第七回…十二篇(学部十二篇・五学部、大学院なし) 大賞一、優秀賞三
第八回…十四篇(学部十四篇・四学部、大学院なし) 大賞なし、優秀賞四
第九回…二十八篇(学部二十五篇・七学部、大学院三篇・三研究科) 大賞一、優秀賞四
第十回…十三篇(学部九篇・一学部、大学院四篇・四研究科) 大賞一、優秀賞三
第十一回…十五篇(学部十三篇・五学部、大学院二篇・一研究科) 大賞一、優秀賞三
そして

第十二回…十五篇(学部十四篇・五学部、大学院一篇・一研究科) 大賞一、優秀賞三

このようにデータで振り返ってみると、東光原文学賞の作品が開始されてから第六回までは投稿作品が多かったということ、第七回以降は第九回を除いてやや少ないかなどの印象を受けるように思います。その間にあつて山をなしている第九回は熊本地震を経験した者ならではの動因が

執筆を後押ししていたものと容易に想像されます。その後、微増して安定しているように見えることは一応の安心材料です。

以下、表彰式当日の附属図書館長挨拶（原文）を掲載いたしまして、受賞者の皆さんへの祝辞といたします。併せて、審査委員の方々および本事業実現に尽力された方々にこの場をお借りして謝意を申し述べます。応募作品の中に腹を抱えて笑わせてもらったものがあり、本当に楽しい時間を過ごす貴重な経験もありました。一言添えておきたいと思います。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

本日は「第十二回熊本大学東光原文学賞 表彰式」をこうして執り行うことができますことを、ここに列席・ご参列いただいている皆様方と共にまことに目出度いことと思えますと同時に、工夫推敲を重ねて投稿してくださった方々、それら投稿小説十五篇から九篇を第一次審査で選出してくださった第一次審査委員の方々、第二次審査で慎重に投稿作品を読み解き読み比べ、それを持ち寄って第二次審査会で貴重な評価の遣り取りを踏まえて受賞作品の決定までご尽力くださった選考委員長・選考委員の方々（大学院人文社会科学学部・教育・文学系准教授 跡上史郎先生、大学院人文社会科学学部文学系准教授 永尾悟先生、熊本日日新聞社地方部長兼論説委員 岩瀬茂美先生）、第十二回熊本大学「東光原文学賞」募集要項の作成から「東光原 News Letter」No. 32」の印刷配布まで周到な準備をくださった縁の下の力持ちの方々、こうした総ての関係各位に、附属図書館長として心から厚く御礼を申し上げます。

私は昨年四月に附属図書館長に就任したばかりの一年生で新米です。多くの投稿作品を實際拝読させていただきました。そして自分には優れた才能とその開花を目の当りにして、それはそれは楽しい思いに浸る一方で、ちょっとばかり妬ましい気持ちも自覚し、しかし最終的には、せっかく装備している潜在能力であるのなら、何らかの形で将来的にも育んでいかれたらいいなあ、などと思ったりもしました。(けしかけちゃいけませんよ、と或る御仁から嚴重注意を頂戴したばかりですが……)

感心するばかりのプロット、よくもああ、こういう筋書きを構想できるなあ、とか。別の投稿作品には何度も何度もポツテリ腹を抱えて、声まで出して笑わされることでした。まあ愉快愉快。受賞者の皆さん、ほんとうにオメデトウございます！(あいうえお順にお名前を発声してみます)

今林さん

中島さん

星子さん

堀田さん

本当に、おめでとう！四名のなかから大賞が発表されます。さあどうなることや、たいそう楽しみです。

以上で、附属図書館長山田からの祝辞のご挨拶といたします。

二〇二〇年一月十七日(金)

熊本大学附属図書館長 山田 秀

小説を書く素養がないこの身には本当のところは分かりませんが、何でも一朝一夕に成し遂げることなど出来ない相談ではないのでしょうか（実際、今回の受賞者は小さい頃から創作していたと表彰式の際に語ってくれていました！）。であるならば、学生、院生、留学生の皆さんには、是非とも日頃から研鑽を積まれますようお願いいたします。とともに、来年度も（もちろんその次の年度も……）多くの意欲的で素晴らしい作品のご応募がありますことを鶴首しております。

以上をもちまして、刊行のご挨拶といたします。



上段：永尾・跡上・岩瀬
下段：中島・今林・山田・堀田・星子

姉妹

カルダモン咲

姉のキョウちゃんは、小さい頃から優秀だった。保育園に通っていた頃は、全園児を代表して卒園式のあいさつをしていたし、小学校に通いだしてからも、持って帰ってくるテストの答案用紙にはいつも満点の証であるはなまるが付いていた。おまけに、キョウちゃんはとても綺麗な顔立ちをしていた。てっぺんからきれいに筋の通った鼻に、厚みのある形のいい口もと。肌は透き通って白く、黒いパージンヘアは風にさらさらと揺れていた。何より、キョウちゃんの目は恐ろしいほど美しかった。

私は、この一つ上の姉のことが小さなころから大好きだった。姉は、愛想笑いもできないし、人が子どもらしいというようなこと―例えばおもちゃを無邪気にねだるとか、近所の子どもたちと外で遊びまわるとか―を全くしない子どもだった。だけど、姉はいつも美しく、私はその美しさを全身で感じていた。洞窟の中に前人未到の壁画を見つけた時みたいに、私が直観的ともいえる素直さで感じ取っていたその美しさがすべてだった。まわりがどうであろうと、なんと一言おうと、姉は姉でいつも独り煌々と輝いていた。

小学校中学年になると、キョウちゃんは読書に夢中になった。はじめのうちは、学校の図書館から何冊か借りたものを持ち帰って夕飯後布団に入るまでの時間に読んでいただけだったが、しだいに熱中してゆき、しまいには日が暮れるまで家に帰らなくなった。

はじめのうちは、私も両親も、

「何読んでるの？」

とか、

「響子は本をたくさん読んでえらいね」

とか声をかけていたけれど、それもだんだん少なくなっていった。

そんなことを言えなくなるほど、姉は何かに熱中しているように見えた。というか、ほとんどそんな話が耳に入らないほど、姉は孤独だったし、きっと姉自身もそのことに気付きはじめていたのだ。

姉は、絵本に出てくる魔女みたいな魔法は使えなかったけれど、それに近い、私が昔ひどく憧れたような魔力の香りを身にまとっていた。これまでに触れたことのない、触れたら火傷してしまいそうなものを、私は姉の中に見つけていた。決してあらわにはならない、けれどたしかに、はっきりとそこにある叫び。そしてそれは驚くほど私を引き付けた。

一方で、普段の生活の中で姉は変わらず私に優しくかったし、両親の自慢の娘でありつづけた。姉は近所の家やクラスメイトからは変わり者扱いされていたけれど、誰になんと言われようと、私が多少はそれに気が付いていようと、私にとってはたったひとりの姉で、キョウちゃんだった。そのことだけは変わりようがなかったし、そのことはとても私を安心させてくれた。

五月のなまぬるい風が吹く日、もうすぐ日が暮れるというのにキョウちゃんが帰らなかったの、心配になって探しに出かけたことがある。キョウちゃんはすぐに見つかった。家から少し離れた小さな川のそばにある外灯の下で、キョウちゃんは本を読んでいた。外灯の白い光に照らされた姉は、水のように揺らめいていて、そのまま川の模様溶けてしまいそうだった。

私は、姉の姿から目を離すことができずにしばらく眺めていたが、だんだん怖くなってきて、姉が川に溶けてしまわぬうちにと名前を呼んだ。

「キョウちゃん」

やはり、気が付かない。二度も三度も呼ぶことにはなんだか抵抗があったので、私はまた姉をじっと眺めた。ちょうど夕方が夜に変わる時で、私たちはまだその境界線に立っていた。なまぬるくて強い風が、体を浮かせてしまいそうだった。私はそのうち自分のことなんか忘れて、水の音を聞いていた。目を閉じていても、景色は十分に描くことができた。赤、藍、紫、虹色、限り

ない色で彩られた空や、外灯に照らされている姉の姿。気が付くと、姉が横にいた。

「迎えに来てくれたんだよね。気が付かなくてごめんね」

「帰ろう」

姉にちっとも悪びれた様子がないので、私は妙に安心してしまった。

私たちは家に着くまでの短い道を、言葉を交わさずに歩いた。五月の風がまた吹いた。それは想像以上に心地良く、そのまま私たち二人をどこか遠くに運んでくれそうな気がした。

ついにキョウちゃんは、学校で習う勉強や宿題といった類のものにまったく手を付けなくなつた。それでもやはり、持ち帰るテストはいつも満点に近い点数だったので、両親は何も言わなかつた。言えなかつたのだ。まるで『ジャックと豆の木』に出てくる豆の木のように、自分たちの娘が、自分たちの知らないところで、手の届かないところに向かってものすごい勢いで突き進んでいくのを、二人はどんな思いで見ているのだろう。

とにかく、そんな姉の態度と反比例して、私は以前よりも真面目に勉強し、宿題も真面目にこなすようになった。でも、どんなに成績が上がっても、先生に褒められても、どこかに満たされない気持ちがあるのだった。私は、ずっと姉になりたかつた。

「響子さんは非常に努力家で成績も優秀です」

家庭訪問に来た姉の担任は、だいたいみんなこんな感じのことを言って帰った。テストで満点を取ることも、本をたくさん読むことも、きっと大人から褒められるいいことだということくらいは私にもわかっていた。だけど、姉の方はそんなことこれっぼっちも気にかけていない様子で、相変わらず本を読みふけていた。本をたべて生きていた。実際に、本を読んでいると本当に食事の口に運ぶことも忘れていた。姉は、一度でも何か断片を掴むと決して手放すことができない人だったのだ。

姉が何を考えているのか、私には全くわからなかったが、それを何とかしてわかろうなどという魂胆はなかったし、姉がそれを望んでいるわけではないということも承知していた。それは、おそらく姉に、他人に対して少しも悪びれた様子がなかったからだろう。

中学校に入ると、キョウちゃんは学校に備え付けてある図書室に通い詰めるようになった。中学校の図書室は、小さい。美術室と同じぐらいの大きさだ。そして、私は、中学生でいる間、そこに出向くことはほとんどなかった。私だけではない。たぶん、ほとんどの人が、図書室という

場所が学校の中にあるということを忘れて過ごしていた。図書室はいつでもそこにあったには違いないが、その扉は透明だったのだ。目の前を通っても誰にも見えない。何か特別な暗号を知っている人にしか姿を見せなかった。姉はその暗号をいつもしっかりと握りしめて持ち歩き、図書室の扉の前に立ったのだ。なんとなくそんな気がした。どんな気持ちで、どんな匂いの中で、姉はそこに立っていたのだろうか。

一度だけ、一人で図書室に行ったことがある。私は、昼休みにはいつも仲間と外に出て、バレーボールをしたり、縄跳びをしたりしていたが、その日はいちばん仲の良い友人が学校を休んでいたこともあってなんとなく外に出る気になれなかった。私は、騒がしくくぐもった教室を抜け出し、人が多すぎる廊下をすりと抜けた。階段を下り、一旦中庭に出る。外の空気はむんと暑かったが、教室よりずっと良かった。あの人間臭いだけの重苦しい空気ではなく、もっと小さなものや、目には見えないたくさんのものが混ざった匂いだ。

別棟の校舎に入ると、下駄箱の土臭い匂いがした。再び階段を駆け上がり、昼休みにしてはずいぶん静まりかえった廊下を進む。網戸になった窓から聞こえてくる虫の音がやたらと大きい。図書室の前にたどり着くと、私は呼吸を整えた。乱れた呼吸は、部屋中に響いてしまいそうな気がした。もう一度深呼吸をしてから、横開きの重い木の扉を開ける。扉は白いペンキで塗られていたが、それはとどころ剥がれかけていて、古い木材が露わになっていた。

図書室の中には午後の強い日差しが影をつくり、日に焼けた本の酸っぱい匂いを浮き上がらせていた。ぐるんと室内を見わたす。人はほとんどいなかった。姉以外には、カウンターで本を読んでいる図書委員らしき女子生徒と、新聞コーナーで英字新聞を眺めているおとなしそうな男子生徒がいるだけだった。扉から一番離れた席に、姉はいた。まだ冷房のついていない室内は屋外よりも気温が高いうように思われた。カーテンでも遮りきれない日差しの熱が、壁や床に溜まってゆくのがわかる。見ると、壁も床もすっかり日に焼けてくたびれている。その中で、姉が座っている窓際の席だけは涼しげに見えた。中庭に面したその席には、葉のよく繁った大きな木がちょうどいい具合に影を落としていた。私の教室からも見えるその木は、なんだかいつもと違って見えた。もう五月だから、葉も梅雨を待ちわびているのだろうか。時々、小さく開いた窓から風が入ってきて、姉の黒い髪をさらさら揺らした。

「昼休みどこに行ってた？」

昼休みが終わるころ、グラウンドから帰ってきたクラスメイトに聞かれた。

「図書室」

と答えると、

「え、図書室？」

という返事。いつもだったら、それなりに受けそうな、気の利いた返答を難なく投げかけられるのだが、それもなんだか面倒だった。キョウちゃんを見たあとは、いつもその強い残光に目が

くらんで、他のことはなんとなくどうでもよくなってしまふ。私の友達が多いこと、男の子にそれなりにもてること、運動神経も成績もそれなりにいいこと―普段私は何よりも大切にしていることがすべて剥がされてしまふ。光っていたそれらのことが、抜け殻のように生気をなくして、私は剥き出しになってしまふのだ。私は結局、自分がどんな返事をしたのかさえも忘れていた。

「今日、図書室に行ったよ」

キョウちゃんと共通の話題があることが嬉しくて、家にキョウちゃんが帰ってくるとすぐに話しかけた。家に帰るのはいつも私の方がずいぶん早い。キョウちゃんは、

「そう」

と短い返事をしただけだったが、それでも、キョウちゃんの目はやはり優しかった。大きくて、黒くて、花びらみたいな形の目。私は、キョウちゃんのような目を持っている人を、一人も知らなかった。本当に吸い込まれてしまいそうな目。どこを見ているのかわからない、一瞬ですべてのものをひきつけてしまうその目が、とても怖かった。だけど同時に、その目は優しかったのだ。とても私には優しすぎたのだ。私は、会話するのに特に長くて気の利いた返事が必要ではないことを知った。実際に、キョウちゃんの短い返事は、他の人とのどんな会話よりも私を満たした。言葉では伝えきれない何かを、そっと包み込む感覚。キョウちゃんとの会話は、やまびこみみたいだと思っただ。

キョウちゃんは変わらさずキョウちゃんのままそこにいたが、私はごくふつうのティーンエイジャーとして、だんだんと他のことに興味を持つようになり、キョウちゃんが何を讀んでいるのか、どんなことを考えているのかについて想像する余裕がなくなってしまった。

私にはじめての彼氏ができた時にも、はじめて化粧をしたときにも、キョウちゃんは本を讀んでいた。

私は高校生になり、大学生になった。学校に行って、バイトをして、遊びに行って、それなりに忙しかったし、その忙しさこそが私の生活そのものだった。キョウちゃんのことを忘れたわけではなかったが、私にとってははくるくると変化していく流行はおもしろく、それについていくことで十分満たされていた。丸十年ほとんど変わらない姿で本を讀んでいるキョウちゃんのこと理解できなかつた。キョウちゃんは自分だけの時間を過ごしていた。もちろん、外の世界では変わらず時計が動いたり狂ったり、目覚ましが鳴ったり止まったりしていた。キョウちゃんは、たくさん抱えたままいつも一人だった。そんなキョウちゃん存在はいつもどこかで私を苦しめていたけれど、姉を責めるような気持ちは私にとってまったく見当はずれのものであったし、そんなことは決してできないということもわかっていた。姉のように、自分でまっとうとも思わずにまっとうに生きている人を、きつと誰も責められはしないのだ。私の姉に対する感情は、嫌悪や苦痛といった類ではなかつただろう。体の内部からめきめきと立ち昇ってくるような、もっ

と純粋な痛みだった。そういう痛みは、時間がたった後でも思い出すことができる。音楽が記憶を連れてくるように、匂いが感情を思い出させるように、ある時突然、一瞬の痛みが突き抜けるのだ。切なさよりもっと鋭い、体が切れてしまいそうな痛み。

大学生になると同時に、私は東京で一人暮らしを始めたので、姉とは離れ離れになった。実家を離れたからといって私の生活に何か特別な変化があるわけではなかったし、一人暮らしにはずっと憧れていたので、むしろワクワクしていた。しかし、いざ荷物をまとめて家を出ようとすると、姉のことが気になって仕方がないのだった。その頃姉はもう、ほとんど私の前に姿を見せないようになっていた。もともと家の横にあった小さな物置小屋に、ランプと毛布と、小さな冷蔵庫を運んで、ほとんどそこに住んでいるようなものだった。私には、姉が小屋の中で何をしているのか、何を思っているのか、知るすが何もなかった。相変わらずキョウちゃんは、何かに夢中になると寝ることも食べることも平気で忘れてしまう人だった。家族がかかる言葉も、ぜんぜん聞こえていないみたいだった。両親は、そんな自分の娘にどう接していいのかわからず困っているようにも見えた。キョウちゃんは病気をしているわけでもなければ、他人を傷つけることも絶対ない。むしろ、小屋からたまに出てくるときは、スプーンを使ってプリンを食べる仕草がなんだからとても可愛かったり、たまに微笑む不器用そうな顔がいとおしかったりしたのだ。だからこ

そ、両親もどうしていいかわからなかったのだろう。キョウちゃんは、規則正しい食事と睡眠をとらなかつたからか、だんだん不健康そうになっていた。たぶん、それはふつうの人が見てわかるほどの変化ではなかつたけれど、私にはなぜか恐ろしいほどよくわかつた。

そんな姉を残して家を出ていくことが心残りだったのかもしれないし、ただ何か出所のわからない負い目を感じていただけかもしれないが、なぜか胸が騒いでしまうのだった。それでも、東京に引越してからしばらくすると、私はそこでの生活に慣れて、またキョウちゃんのことを忘れていった。忘れるといっても私の場合、〈思い出さない〉というだけで、実際キョウちゃんはいつでも心の底にガムみたいにひっついていて。それでも私は、時々講義をサボったり、彼氏をつくったりしながら、ふつうに大学生活を過ごしていた。テニスのサークルにも行ったし、バイトもした。たまに面倒な人間関係の問題にぶつかる以外は順調に暮らしていた。それなのに、どこに行ってもなぜか息苦しいような気がしていた。バイトでお金を稼いでも、彼氏とセックスをしても、旅行に行っても、というより、それらが充実すればするほど、なんだか息苦しくてたまらなかつた。でも、どこからどう見ても私の生活は順調だった。

自分でさらに充実させようとしてもみた。おしゃれな料理本を買って、彼氏の為に何時間もかけて料理をした。もちろん彼は喜んで食べてくれた。博物館や美術館にも足を運んだし、映画も頻繁に見た。本も少しは読むようになった。詩にだって手をつけてみたのだ。私は、そうすることで自分がどんどん善い人間になっていくと信じていたし、息苦しさもたまにやってくる鋭い痛みも、ぜんぶ消えていくと信じていた。だから知っていることはどんどん増えたし、ちらっと

読んだ本や映画をインプットしておくだけで、それらをアウトプットする機会はいくらでもあった。他人との会話の中で、思っていたよりも自分が話したいことを話せるものなのだということが気が付いてからは、どんな人との会話でも、主導権を自然とつかめるようになっていた。私は、どんどん膨張していく知識を誰かに言いたくてしかたがなかった。それらを自分の中だけに貯めておくことは、とてもできなかった。

一度だけ、キョウちゃんが東京に来たことがある。私が大学二年生の夏だ。突然ケータイに電話がかかってきたのだ。その年、正月に実家に帰ったときキョウちゃんには会っていなかったのだ、私はすこし緊張していたのだが、キョウちゃんの声があまりにもふつうだったので、なんだか拍子抜けしてしまった。

「もしもし？ なっちゃん？ 来週東京に行くことにしたから、月曜日の夜、なっちゃんのところ泊めてくれる？」

口調はいつものように平坦で穏やかだったが、久しぶりに聞いた声にはどこか有無を言わせないつよい力があった。私は短く返事をした。別に、姉に来られて困るような理由もなかった。それよりも、どうして姉が東京に来るのか、私には全く想像がつかなかった。あんなに小屋の中から出てこようとしなかった姉が、自ら東京に来ることを決めたのだ。ヤドカリが自ら住処としてい

た貝を脱ぎ捨て、裸で歩いてくるような奇妙さがあった。私はその時の電話で、なぜ東京に来るのか何度も聞こうとしたが、ついに聞くことはできなかった。

東京に来た日、姉が私のアパートに着いたのは夜の十一時頃で、それまでどこで何をしてたのか、私に話しはしなかった。私もなぜか、何も聞くことができなかった。でも、姉はこれまでもそういう人だったし、特におかしなところがあるわけでもない。

「大学はどう？」「アルバイトは何してるの？」

と、姉は口少なに話しかけてくれた。私は、姉が投げかけてくれるそんな質問にどれ一つとしてうまく答えられなかった。だけど、姉の前では、私は言葉に詰まっても平気だった。そのかわり、何かを取り繕うこともなかった。言葉になる前の、言葉になった後よりはるかに無秩序な、それでいて何かとてつもなく感動的なものが、姉の前ではチラチラと顔をのぞかせていた。私は、このまま本当に姉の目に吸い込まれていくような気さえしていた。彼女の目は、本当に、それほど、美しかった。私と姉がそこにいること以外は、その他のことは、自分が息をしているのを忘れてしまうほど静かだった。ほんとうにこんなことがあるのだ、と私は思った。現実には起こりえない、少なくとも自分には起こりえないと思っていたことが、その一瞬、ほんとうに起こったような気がした。一度こういう体験をしようとして、そのほかの、一たとえば過去に読んだ物語の一場面や、思い描いた人との出会い―が、これからの人生で起こりうるような気がしてきた。これまでの出来事や、これから起きることが、すべて最初から決まっているような、でも絶望とは言

い難い不思議な感覚だ。

「キョウちゃん」

私はふと不安になって、子どもの頃寝室で母親を呼んだように姉の名前を呼んでみた。さっきまでそこにいた姉が、もしかしたらいなくなってしまうかもしれないと思ったからだ。

「どうしたの」

という、語尾にクエスチョンマークのついていない返事に私は自分でもわけがわからなくらい安心して、そのまま黙っていた。そのうち姉のその声は、部屋の白い壁にゆっくりと染み込んでいった。それを見ているうちに、私たちの間には沈黙が膜を張ってゆき、二人はそのまま眠った。その夜は、私の部屋だけが銀河の中にぼつりと浮かんでいるみたいだった。なめらかで、澄んだ銀河の中。翌日の朝、姉は列車に乗ってあの小屋へ帰っていった。飛行機でも新幹線でもなく、列車は姉にとってもよく似合っていた。

その翌月、実家から電話が入った。母から連絡が来ることは頻繁にあったが、そのほとんどすべてはメールによるものだった。だから、時々電話が入ると少しドキッとす。私は昔から心配性なのだ。父が出張に出かけて行くときや飛行機が離陸する瞬間、そのすべてに暗い気配を感じとってしまう。それは心配性というよりもむしろ、私の感性そのものであった。

しかし、大抵の場合は何も起こらない。私の感じる気配とは裏腹に、現実はおもしろいくらい平和に進んでゆく。そのことにも慣れてきていた。今回もその類だろうと思った。着信があった

時私はアルバイトの途中だったので、後でかけなおすことにした。

そのまま、しばらく時間が経った。忘れていたのだ。実家から着信があったことも、心臓が少し跳ね上がったことも。そのことを思い出したのは夜になってからで時間ももう遅かったので、電話をかけなおすかどうか迷ったが、みんなもう寝ているだろうと思いつきの朝にかけることにした。

母の携帯電話にかけたはずなのに、電話には父が出た。それは、姉が死んだという知らせだった。父の声は妙に落ち着いていた。とにかく帰ってきなさいと父が言うので、私はわけもわからないままリュックに財布と携帯だけを詰めて、タクシーに乗り込んだ。そこからの記憶はほとんどない。ただ一度、駅のトイレで鏡を見た時、自分がとてもひどい顔をしていたということだけは覚えている。どこがどうひどかったのかは、覚えていない。気が付いたら実家に帰ってきていた。姉のいない実家に。そこでようやく、何が起こったのか少しだけわかったような気がした。だけど、ものごとは面白いほど淡々と進む。私だけが飛行機に乗り遅れたみたいだった。乗り遅れたくせに、なんとかならないものかと諦めきれずにいる。もう飛行機は飛び立ってしまったのに。まさか、自分が飛行機に乗り遅れるなんて思ってもみなかった。あえて例えるならそういう状況で、私はただもう呆然とするしかなかった。

次に気が付いた時には、葬儀が終わっていた。夢を見ているような気がした。ずっと醒めることのない夢。

そのままどれくらい時間が経ったのかはわからない。ある金木犀の日、私はふと思立って、

あの小屋に足を向けた。どこにも行きたくなかった。新しいゴムボールのように、動けばそのぶん傷ついてしまう。それなのに、そんな気持ちとは裏腹に、奇妙な好奇心とも言える何かが、その日私を小屋に向かわせていた。それは、姉にずっと抱いていた私の気持ちととてもよく似ていた。

小屋の中は静かだった。そこにあるものすべてが持つ静かさが、自分の内側に佇む静かさとそっと共鳴していた。小屋の中はだいたい想像していたとおり。四方は本棚に囲まれていて、右奥の隅に小さな机と椅子が置かれている。その上には数冊のノートとペン。ノートはすべてが枠線のない白紙タイプのもので、なんだかどれもくたびれていた。ふと、そのくたびれたページの隙間で姉が笑っているような気がした。なんとなく、自然とそんな気がしたので。一瞬、私はたしかに笑っている姉を見た。心に浮かんでくる姉はいつも、穏やかだけれどどこかきびしい目をしていたので、自然に笑っている姉が浮かんできたことに自分でも少し驚いた。そうだ。姉は笑顔のとてもかわいい人だったのだ。そこではじめて、私は少し泣いたと思う。

机の引き出しには、いくつかのCDが入っていた。姉が音楽を聴いていたことに私は驚いた。姉は本ばかり読んでいると思っていたからだ。同時に、自分が本当に何も姉のことを知らなかったことを思い知った。だけどそれでよいのだ、とも思った。誰かのことを思うことと、その人を理解することはちがう。他人のことを何もかも理解できると思うのは、あまりに謙虚さに欠けている。証拠に、私はとても姉のことをいとおしいと思う。

外の風が小屋の壁にぶつかったのか、びゅう、とくすぐったい音がした。小屋の中は相変わらず

ず静かだった。私は呼吸することを思い出して、そこにあったCDを一枚、そっと手に取って見た。それは、姉に似つかないロックバンドのアルバムだった。そのバンドの名前は聞いたことがあった。残りの五、六枚をひとつずつ手に取って見てみると、それはすべて同じバンドのものだった。私は、本棚の一角に埃がかったCDプレイヤーを見つけ出し、その中で一番ジャケットが好みだった一枚を挿入した。そのCDジャケットは濃い水色で、真ん中に黒いロングヘアアの少女が微笑んでいた。

その音楽を一言でいいあらわすならば、ヘンテコ、だ。最近の流行りの音楽とは似ても似つかぬ響きを持っていた。ボーカルの声はやたらと鼻にかかり、決して歌が上手いとは言えない。おまけに、ロックバンドのボーカリストだとは思えないほど彼の活舌は悪かった。ギターもベースもドラムもちゃんとして、それぞれちゃんと役割を果たしているのだが、主張の強いキーボードのせいか、全体的にどこかアンバランスな感じがするのだった。その曲を、歌詞を聴いていると、胸がむずがゆいような、締め付けられるような不安定さをおぼえた。決して、癒されるとか、気持ちよくなるとかいった類のものではなかった。だけど、花びらの色が変わる瞬間のような鮮やかさと繊細さで胸に飛び込んでくる。そしてその衝撃は、遠い記憶すら呼び起こすような気がした。なまあたたかいいものが足先からゆっくり這い上ってくるのを、私は感じていた。

何より私を驚かせたことがある。歌詞カードに挟まっていた写真の中からこちらを見つめる男の人の目が、姉のそれにそっくりだったのだ。五人の中の、真ん中に立っている男の人。サラサ

ラとした髪の毛は無造作に肩まで伸び、Tシャツにジーンズという出で立ちで、かったるような表情を浮かべている。それなのに、その人の目は驚くほど美しかった。写真越しにも吸い込まれてしまいそうなほどよかった。大きくて、黒い瞳。その人はたしかに、姉にどこか似たかがやきを持っていた。私は、すぐに走って母屋に戻ると、そのロックバンドのことを、その人のことを調べはじめた。

私がある人に出会った時、その人はもうこの世にいなかった。それを知った時、内臓を下から突かれるような、鈍い痛みで襲われた。やるせなさだけが残るような、とても鈍い痛み。姉がいなくなったときのそれとも違った。しかし、たとえその人がこの世に存在していなかったとしても、出会いは出会いなのだ。私は、その人に出会ってしまった。その出会いは、普段私があてにしている時間も、おなじ場所にいるという空間も、必要としていなかった。出会いは、ただ出会いとしてそこにあるだけで、条件なんてものはひとつもなかったのだ。それはいつも、楽しくて少しせつない。

とにかく、私はその人のつくった音楽を聴き漁った。聴きつづけた。そのたびに、眩しい光に引き裂かれるように苦しみが訪れて、その後、包まれるような優しい気持ちになった。嵐が過ぎ

去るように。そして、まるで標高の高い山に登ったときや恋をしたときと同じように、その人は私の世界をまるきり変えてしまった。その世界は前よりもっと鮮やかで、出口のないものだった。曲や詞、日記、インタビュー、そのすべてで彼は自分をさらけだしていたが、にもかかわらず奥のみえないところにどうしようもなく惹かれていた。それはきっと、彼の経験や思想から湧き出る言葉と音のせいだろう。私は、彼のその目から離れることができなかった。

瞳という名の湖は、潤っていたり、透き通っていたり、濁っていたり、干からびていたりする。美しい湖は、その人自身だけでなく、それを覗き込んだすべてのものをうつすことがある。私は姉のことを思い出していた。つめたい水のなかで、過ぎ去った時間のことを思い出していた。その時間の中にいる姉は、だんだんとたしかかなものになってゆく。そこにいたときは、あんなにもわからなかったのに。過ぎ去ってしまったものは幻のように上手く捉えられないと同時に、二度と動かないものへと変わってしまう。そのことがたまらなく寂しかった。ずっとその時間の中にいたかった。それなのに、キョウちゃんはもういない。私の時間だけが、変わらず進んでいる。その時間にときどき訪れる切れ目から、キョウちゃんの目が光る。美しく、鋭い光だ。

「ねえ、物置に古いギターあったよね？」
雲はないのに月が見えない晩、私は母にたずねた。もはや東京に帰りたとは思わなかった。就

職活動もアルバイトも、どうでもよかった。稼いだお金で買った服も、ちょっと高級な化粧品も、まったく心を揺さぶることはなかった。ただ、姉の声を聞いたあの部屋だけが少し気がかりで、胸が苦しかった。

外は真っ暗だった。新月の醒めた空気が繊細な布のように夜を包んでいた。星がちかちかと控えめに瞬き、獣の遠吠えがどこからか耳をかすめる。母屋から庭を抜け、少し歩く。引っ掛け鍵の扉を開けると、埃っぽく土臭い匂いが広がった。私は、この匂いが昔から好きだ。むせかえりそうに妖しげだけれど、どこか澄んでいる。姉の本棚を抜け、さらに奥へと進む。小屋の中は、外よりもさらに真っ暗で、片手に持ってきた防災用の懐中電灯だけが頼りだ。足元に散らばる焼き物の壺や、いつ何を漬けたかわからないような漬物の大きなビンを通り越して、もう少しだけ奥に進むと、大きな影が見えた。それが、父が若い頃に弾いていたという古いフォークギターだった。ライトを当てるとかなり埃をかぶっていることがわかったが、弦は一本も切れていなかったし、他に目立って壊れていそうなところも見当たらなかった。私はそれを丁寧に抱えて、ゆっくりと出口へ向かった。もはや懐中電灯は必要なかった。つんと冷たい空気が漏れこむ扉を開く。冷たい空気が頬に触れ、あたりはびっくりするほど静かだった。私は走った。積もった落ち葉が深く、足をとられる。それでもなぜか、走らなければならないような気がした。そして、その感覚を私はずっと前から知っていた。

奇妙なティータイム リサリサのせきせき

あ、と思ったときにはパンツを落としていた。

それは夏の終わりの夕方、どこからともなく風に運ばれてきた金木犀の濃厚な香りに秋を感じながら洗濯物をベランダから取り込んでいたとき、洗濯バサミをフライング気味に外してしまっただけで、あっ、と思った瞬間にはすでに私のパンツは蜜色の夕焼けに照らされながら音もなくひらりと落下して一個下のベランダの植木鉢の中に吸い込まれてしまった。

よりによって、パンツか。

呆然としながらベランダから身を乗り出して、よその家の植木鉢の中に放り出されて心細そうな私のパンツを眺める。ハンカチやタオルじゃなくなぜパンツ。他人様の敷地に落とすならブラジャーの方がまだマシだ。だってブラジャーならギリギリ笑い話にできそうだけどパンツというのはシャレにならないというか、恥部そのものをさらけ出してしまったような恥ずかしさで笑い飛ばそうにも顔が引き攣ってうまく笑えない。

不幸中の幸いとも言うべきか、淡いピンクの生地レースが控えめにあしらわれたあのパン

ツは誰かと温泉に行ったり人の家に泊まりに行くときに愛用している『よそいきパンツ』だ。人に見られることを想定したいわゆる一軍パンツであるため清潔さ新品さ可愛さの点は抜群である。とはいえこんな形で人の目に曝け出されるとなると話が違う、まるで違う。羞恥の度合いと重みが違うのだ。

うっすらと埃の積もった手すりに意味もなく指で『∞』のマークを何度も描きながら、落ち着け、まずは落ち着くんだ、と自分に言い聞かせた。ほら、今までの人生振り返ってみろ、今よりもっとヤバい状況なんていくらでもあったはず。そうだ思い出した、おととい、前ボタンがズラッと付いたロングスカートを履いて市街地に繰り出したときのこと。バスに乗っているときから、なんとなく人の視線を感じるなどは思っていたもの大して気に留めていなかった私は、トイレに入って鏡で自分の姿を見て絶句した。スカートの前ボタンが二つ、ちょうどパンツの部分がかかと開いていて中の世界が丸見えだった。パンツ丸見えとはまさにこのことよ。クワァァと叫びながら両手で耳をふさいでトイレの便器に頭を突っ込みたくなるほど恥ずかしかった。私はすぐさま個室に駆け込み、火照る体を抱えて便座の上で三十分間涙を堪えながら目を閉じて過ごした。今思い出しても恥ずかしさのあまり身体中がむず痒くなる。あれは本当にトラウマレベルの恥ずかしい経験だった。トラウマといえれば思い出した。ちょうど一年前、通い始めたばかりの自動車学校で盛大にやらかしたときのこと。初めての乗車授業にて緊張で力みすぎていたせいで右折の際に力加減を間違えて思いっきりガコッとウインカーを破壊し、そのせいで変な角度に折れ曲がったウインカーに動揺して奇声を発しながらアクセルとブレーキを踏み間違えて隣の教官

がブレーキを踏む間もなく対向車線の検定車に正面からぶつかった。冗談みたいな話だが本当に起きた出来事なのだ。幸い誰も怪我はしなかったものの、私は授業開始わずか二十分で教習車二台を破壊してしまった。賠償金として支払った十八万円を受け取ったとき教官は「路上であんなことにならなくてよかったと思うよ、誰にでも失敗はあるよ」と笑ってみせていたが、のちほどトイレから出たとき視線を感じてふと見ると、少し遠くから教官が怯えたような軽蔑したようなまろで理解不能な未確認生命体を見ような目で私を見ていた。無理もない、車を破壊したのだから自業自得だ、ということは自分でもわかってはいたが、人外を見るようなその目が忘れられず私は静かに傷ついた。

見ろ、それに比べたらなんだ今の状況は。パンツを下に落とした、だ？平凡すぎて笑っちゃまうぜ……なんて、威勢よく言えるのは心の中だけ。いくら過去の失態コレクションを引っ張り出してズラリと並べて比較してみたところで現状は変わらないのだ。観念した私はため息をついても一度改めて手すりから階下を覗き込んだ。

下界のベランダには、パンツが入った植木鉢以外にもプランターやそれらしきものがいくつかわ置いてあったが、そのすべてに雑草なのか観葉植物なのか得体の知れない植物がよきによぎと溢れていた。ベランダの隅の方には枯葉や潰れた空き缶が転がっていて全体的に荒んだ印象がある。

はぁ、とため息をついてみた。ここは学生アパートだけど、なぜか下の住人は学生ではないという予感がある。近所づきあいは皆無なもの、生活音が聞こえてくる時間帯や気配が学生とは

何か違う時間の流れであることだけは随分前から薄々気づいていた。とはいえ性別も年齢もわからない。得体が知れないことに変わりはない。

そうだ、しらばっくれようか。ここ最近ちょうど風が強い日が続いているし、どこからか誰かのパンツの一枚や二枚、飛ばされてきたとしても何の不思議も、ない……ことは流石にないか。台風ならまだしも、こんな秋のそよ風ぐらいでパンツが飛ばされることがあるかっての。となると困った。このアパートは二階建て、おまけにお隣は空き部屋だから落ちたパンツの持ち主が私であることが階下の住人にバレるのは時間の問題だ。

ああ。頭が痛い、脳みそが痺れる。じんじん痺れて、なんだか視界までちかちかしてきた。どうしよう。私だって華の女子大生だ、考えてもみろ、そんな華が履き散らかしているパンツとなると一部の界限ではそれなりに付加価値があるはずだ。もし階下の人間がド変態だったらよからぬ悪用をされるかもしれない、そうじゃなかったとしても気味が悪い。このままパンツが消えたとしたらふとした時に今日のことを思い出して、地球上のどこかに存在し続けているであろう忘れ去られたパンツに想いを馳せて気持ちが悪くモヤッと曇るかもしれない。些細なことだとしてもただでさえ塵が積もって軋むほど重い恥を背負った人生に、さらにくだらない汚点を背負いこむのはごめんだ。これはやはりパンツを迎えに行くしかない。

恥ずかしさと緊張で喉をヒリヒリさせながら、私は階下の人間に対するせめてもの詫びにと台所にあったお菓子に適当に袋に詰めて、布団に放り出してあったカーディガンを部屋着のスウェットの上に羽織るとサンダルを引っかけて玄関を出た。一階へと続く階段を降りていく途中で無残

に潰されたカMEMシらしき死骸を見かけて、心の中で無感情に「合掌」と手を合わせた。汚いと可哀想とか感慨を浮かべる余裕はなかった。

階段を降りると、私の部屋のちょうどすこんと真下の位置にドアが現れた。自分の部屋と同じドアのはずなのに想像以上のよそよそしさに足がすくむ。動揺しているせいか、このドアでもし舐めたらどんな味がするのかなあ、なんて場違いなことを頭の隅で小さく考えてしまう。インターホンに恐る恐る手を伸ばしては引っ込めてを八回ほど繰り返し、さんざんためらった拳句にようやく震える指で呼び鈴を鳴らした。が、何も鳴らない。インターホンが壊れているのか、もしくは受話器が外してあるのか。心を鎮めて耳を澄まし待てども待てども家の中からは物音ひとつ聞こえず、静かな廊下のアパートには金木犀の香りを乗せた風が音もなく吹くだけだった。静寂に心が折れそうだ。だけでもし、今このまま引き返したら私は言い訳をつくって二度とこのドアには来ないだろうと思ったので自分を奮い立たせてトントン、と控えめにドアをノックしてみた。しかし相変わらず何の反応も返ってこない。仕方がないのでさっきより強めにノックしてみようと思いきって拳をドアに叩きつけた。ちょうどそのときガチャッと乱暴に鍵を外す音がした。と同時にドアが十センチほど撥ね開けられ、勢いで派手な音を立てたドアチェーンに内側から頬の肉を食い込ませながら顔面が目の前に現れた。まるで動物園のがらんどろの檻を覗き込んでいたら突然中から飢えた虎が現れて檻が歪むほど勢いよく鉄柱と鉄柱の間に鼻をねじ込んできたかのようだった。

「なにか!」

ヒステリックじみた甲高い声で女が言った。ドアの隙間からぎよろついた片目がこちらを睨みつけている。頭の上で無造作に束ねられた黒髪は鳥の巣のような形状を作りながらも毛先は四方八方にうねっていて鼻の先に触れそうな距離にあった。その髪はなんとなくベランダに放置されていた荒れ放題の植物を彷彿とさせた。女はドアの狭い隙間から右目を覗かせたり反対の目を覗かせたりするため、しきりに顔を動かしてはドアチェーンに頬肉をねじ込ませていた。彼女が動いて角度が変わるたび、目の落ち窪みや顔に落ちる影が変わって若く見えたりひどく老けて見えたりする。奇怪すぎるその様に私は言葉を失い、立ちすくんだ。

「……あの、私、上の階に住んでいるものなんですけど……」

細く開けられたドアの隙間から少しカビ臭いようなこもった臭いがした。名乗ろうとしたが異様な光を宿したギョロ目に見つめられて頭の中が真っ白になり言葉が出てこない。美人でもブスでもないが、ただ目だけが異常に大きい。目を閉じたときにまず最初に思い浮かぶのは間違いなくその眼球だ。強烈なインパクトで迫ってくる視線から逃れたくて、私は目を逸らすように爆発気味の髪の毛がうねる女の頭部へ視線をスライドさせた。人の頭一個分はありそうな存在感の塊みたいな鳥の巣ヘア。そのボサついた髪の毛を無造作に束ねているヘアバンドをよく見るとかなり色褪せたサンリオキャラクターのキキララがプリントされており、二頭身キャラがお星様の杖を持ってニコニコと微笑んでいた。女が眉を上下に動かすたびに皺の寄るおでこの上半分を覆ったヘアバンドのファンシーさだけが暗いドアの向こうで浮いていた。

「ごめんね、アナタにはわからないと思うけど立て込んでるの、すごく」

甲高い声で早口にまくし立てられた。まずい、と思ったときには彼女はドアをすでに半分閉めかけていて、慌てた私は咄嗟に手に持っていたお菓子の入ったスーパールのビニール袋をドアの隙間に滑り込ませた。突然目の前に突き出されたビニール袋に「のぁッ」と妙な声を出す。

「あ、あの、申し訳ありませんちょっと、落し物をしまして」

とりあえず事情を話そうとしてドアに手をかけた瞬間、女は容赦無く私の手をバチンと叩いた。痺れる感触。手をはたかれた瞬間、女の右腕にびっしりと黒い刺青のようなものが見えた。思わず手を引っ込めたその拍子にお菓子の入ったビニール袋がドアの外に吹っ飛び、カントリーマムやパイの実が廊下に散らばった。

「え？」

「立て込んでるのでね、ほんとにね、すごく」

「あ」

何が起きたかわからないまま漫画みたいに口をパクパクさせている私の目の前でバダムと音を立ててドアが閉められた。間を空けず中からしっかり鍵をかける音が聞こえたとき、私は混乱のあまり閉められたドアを見ながら笑ってしまった。初対面の人間に手を叩かれたショックで指先が震えていたが、怒ることも泣くこともできなかった。刺青のようなものが見えたが、見間違いだろうか。ギョロ目と刺青。アンバランスでちぐはぐだと感じる。私は動揺した気持ちを鎮めようと叩かれた手のひらをじっと眺めて自分の手相に意識を集中させてみたが、不気味なギョロ目とメルヘンチックなキララのヘアバンドが交互に脳裏に蘇って気持ちは全く収まらない。夢だ

ろうか。夢かもしれない。だって流石にこれ、現実にしては常軌を逸しているよなあ、と唇に薄ら笑いを浮かべてみる。深呼吸をしたら吐いた息が震えていたのがなんとなく癪だった。しゃがみこみ、廊下に散らばったお菓子をのろのろと拾って袋に詰めなおす。床に打ち付けられたパイの実が粉々に砕けていた。拾ったお菓子はすべて一〇二のドアノブにかけた。このお菓子が怒れる女に対して何か役に立つとは思えなかったが、この品々を持ち帰る気にはなれなかった。

ご近所トラブル、というやつか。こちらはトラブルるつもりなんてさらさらなかったというのに。頭の中で『はじめてのご近所トラブル』というポップな文字が深刻な状況には似合わないカラフルなイメージでモコモコと頭の中で起き上がった。文字の周りにはさきほどのキキとララが星の杖を持って飛んでいる。これは引越しは避けられないかもなあ。

その夜は、夕方の強烈な出来事のせいで明け方までなかなか眠れず、暗い布団でラジオを聞いて過ごした。

@ @ @

とろとろした眠りの中で遠くからチャイムらしき音が聞こえたとき、寝ぼけた頭でああ昨日日つけっぱなしにして寝てしまったラジオだろうと思った。しかしチャイムの音は鳴り止むことなく、徐々に「ピンポーン」と輪郭を持ったはっきりとした音になって鼓膜に響き、そのせいで無理やり夢の中から意識を引きずり出された私はハッとすると同時に慌てて飛び起きた。こんな朝っぱ

らから人の家に来て何度もチャイムを鳴らすなんて、どう考えても普通じゃない。一気に目が覚めて背中のあたりがヒヤリとする。カーテンの外は薄暗い。時計を見るとまだ六時前だった。

もしかして……、と昨夜のギョロ目がちらりと脳裏に蘇って胃がひっくり返りそうになったが、いやまてまて、宅配便かもしれないと一縷の望みをかけながら足音を立てないよう抜き足差し足で玄関まで向かってドアの覗き穴からそっと外を覗いてみると、やはりそこには昨日のギョロ目がしっかりと佇んでいてそれを見た瞬間シンブルに呼吸が止まった。

パッとドアから身を離し、吐き気で胃ごと口から出そうになったのを両手で抑えながら、懺悔にも似た気持ちで日頃の行いを振り返る。わ、私ッ、私ってあの女に何かした？いや、たしかに何かと思いついた節がないわけではない。むしろ心当たりがありすぎる。平屋で生まれ育った習慣が抜けないせいでも部屋中をドストロス大きな足音を立てて歩いてしまっし、そういえば酔ったとき酒瓶で床を殴りつけたことも何度かあった。ここ最近では風呂上がりに夜な夜なACDCを爆音で流しながら上裸で踊るのが日課になっている。それとももしかして、こないだ焚いたお香がダメだった……？次々と出てくる脈絡のない心当たりの多さに我ながら唖然としつつ、怯えながらももう一度覗き穴に右目を近づけてみる。当然だがやはり女はそこにいた。魚眼レンズのように歪んだ覗き穴からは彼女の表情まではわからないが、昨日と同じキララのヘアバンドだけが歪んで大きく引き伸ばされたように映っていた。とりあえずここは居留守でやり過ごそうと決め、震える手のひらで口元を覆いながら玄関扉の横の壁に背中をくっつけると息を潜めてそのままずるずるとしゃがみこんだ。その間もずっと不規則にチャイムは鳴り続けていた。

「あのおー！パンツっ」

そこそこ厚みのあるドアを悠々と越えて聞こえてきたデカイ声にはっとして顔をあげる。パンツ？今、もしかしてパンツって言った？

「この生地、てろてろしているね、まさか、勝負下着とでも言うやつかあ……」

だんだんと語尾は小さくなって最後の方は独り言に近かった。勝負下着ではないはずだが自分のパンツのことだと確信した私ははじかれたように立ち上がった。勢いよく鍵を回してドアを開けると、冷えた空気の塊が玄関に入ってきた。雨に濡れた金木犀の匂いがする。

まだ薄暗い朝方の空気の中に立っていた彼女は、私と目が合うとパッと表情を輝かせた。祖母のお下がりと言われたらしくりくるような色褪せた花柄の淡いベージュのワンピースを着て、私と目が合うとパッと表情を輝かせた。一目で、昨日とは打って変わって友好的な態度であるのがわかった。相変わらず二十代にも三十代にも見える年齢不詳な雰囲気を感じていたが、明るい表情からは生き生きとしたエネルギーが放たれており昨日よりはるかに若く見える。その顔にはしっかりと念入りに化粧が施されていることにやや驚きながら「お、はようございます」と、とりあえず当たり障りのない挨拶をした。遠慮がちな会釈をした私に彼女は紅が塗られた唇をにっと広げて歯を見せた。

「パンツ、落としたんだよね？そうだよね？昨日はちょっと、かなり、状況が込み入ってたもんだから、申し訳なかったと思ってるんだけど、アナタがまさかパンツを取りに来たなんて全然知らなくて……」

彼女は大きく悪びれる様子もなく早口で話し始めた。言葉に合わせて激しく動かされる手の動きを無意識に目で追ってしまう。

「昨日はちょうど実験してて、あっ、ワタシ夢の研究をしてるんだけどね。それでアナタが来たときも半睡眠状態を保ったまま、現実と夢をどこまで交わらせるかっていう境界の実験してたんだけど」

まあいけば錯乱状態だったんだよね、と彼女は言う。アハハハと口を大きく開けてあまりに豪快に笑うので、わけがわからないまま私もつられてちょっとだけ笑ってしまった。ハハ。しかし情報量が多い上に彼女だけの専門用語が混じっているせいでよく理解できない。ハハ。

「だからアナタのことも何もかも夢だと確信してたんだけど、あのあと夜中にちゃんと起きてみたらびびくり、ドアノブにお菓子があるじゃない、まさかと思って実験用の録音テープも聞いてみたらアナタの声も入ってるじゃない、これは夢じゃないのかもしれない、思ったらもうね夜明けが待ち遠しくって」

ドアノブをきつく握りしめながら、これは俗に言うアブナイ人ではなからうか、と怯えた。私も昨日の彼女みたいに内側からドアチェーンをかけておけばよかった。

「アナタお菓子持ってきてくれたよね、だからワタシ、紅茶持ってきたの」

そう言って彼女はワンピースのポケットから何やらごそごそ取り出すと、おもむろに私の目の前にぐいっと突き出した。近すぎてよくわからなかったが、ほのかにいい香りがしてよく見るとそれはむぎ出しのティーバッグだった。

「これは……」

状況がまったく飲み込めず、顔の前に突き出された裸のティーバッグをぼかんと見つめた。ちゃんとお菓子も持ってきたんだよ、と言って彼女は昨日私がドアノブに残して帰ったお菓子が入ったビニール袋を得意そうに振ってみせた。

「さあ……お茶会をしましょう」

「唐突に彼女が言った。妙にきりりと力のこもった劇風な口調だった。脈絡のなさに驚いて「いッ、今からですか」と思わず素っ頓狂な声が出た。

「だいじょうぶだよ、ワタシ、たとえ部屋が汚くても散らかっててもそういうの全く気にしないタイプの人だからさ」

「いえ、あの、そうじゃなくて……」

流石に冗談だろうと思って彼女を見ると、こぼれるほどの笑顔で見返されて混乱した。これは？ 一体これはどういう状況なのだ？ 嫌がらせか新手の犯罪か何か？ それにしては妙だ、何が妙って、たしかに彼女の態度や行動は全てが常識外れだけど陰湿さといったものがまるで感じられないのだ。彼女の目は弧を描くように細められており、昨日の異様なギョロつき方とは程遠い穏やかさだった。親しんだ近所の友人のところにお茶を飲みに来たかのようなフラットさと自然すぎるテンション。何もかもが当然でしょとでも言いたげな堂々とした雰囲気。ていいうかなんでこんな堂々としてんの？ 行動に一切の迷いが無い。彼女の中では全ての思考回路がストレートにまっすぐ完結している清々しさがある。これって困惑してる私の方がおかしいの？

私はたくさんの「??」を抱えたまま、彼女の笑顔に気圧されて「どうぞ……」と玄関に彼女を侵入させた。彼女は、お邪魔します、でも、失礼します、でもなくなぜか「おあがりになりまーす」と初めて聞く挨拶をすると愉快そうにヒヤッ、ヒヤッと不規則な笑い声をあげた。私はヒヤヒヤと文字通り声を出して笑う人を初めて見た。

@ @ @

彼女の名は江戸マイマイと言った。奇天烈な名前だと思ったが、そう名乗られたのだからとりあえずそう信じるしかなかった。

髪の毛は癖っ毛なのか、相変わらずひどくボサボサしており、年季の入った例のキキララのヘアバンドで束ねてある。薄紫のアイシャドウが塗られたまぶたには、彼女が話しながら下を向くたびに丁寧なアイラインまで引いてあるのが見えた。

家に通された彼女は私が台所のIHの電源を入れてやかんを温めている間、無遠慮に部屋の隅々を見て回り「不思議だねえ、間取りは一緒なのにこうも違うのかあ、全然違う部屋みたい」とひとりで楽しそうに感心していた。彼女は裸足だった。そしてひとしきり部屋を散策し終えると迷いなく私のお気に入りの座椅子にどかっと座った。彼女の一挙手一投足はすべてがいちいち想像を越えていた。

彼女の行動を目で追いながら、なぜだろうと静かに思った。誰がどう考えても怒るシチュエー

ションなのに、なぜか怒りが湧いてこない。あまりの混乱でまともな感情がショートしてしまっただのか、それともこの人の常識外れな行動に陰湿さが欠片も感じられないから呆れているのか。わからない。怯えてはいる、警戒もしている。だがほんのちょっとだけ江戸マイマイという強烈な人間に対する好奇心に似た感情がひっそりと生まれていることは否めない。

「なんだかおしゃれな空間だね、今度、スケッチさせてくれないかな。あっ、ワタシ漫画家やってるんだ、実は」

ヒヤヒヤ、と彼女は近くにあったクッションを尻の下に敷いて座り直した。足を崩すときに婆くさいワンピースの裾がめくれて白っぽいパンツがチラッと見えた。白、というのがやけに生々しくて私は見えてはいけないようなものを見てしまった居心地の悪さで視線を逸らした。

「はじめはね授業の一環として、自分の見た夢を再現したくて記録し始めたの。そう、いわゆる夢日記ってやつね。そしたらどんどんハマっちゃって、録音テープで寝言を記録して文字起こしをしたり、脳波のデータをとったりしてね。それでそういうことを記録がてらブログで書くようになったの、ちょっとした挿絵付きでね。そしたらある日、出版社からオファーがあって、アナタのブログは気持ち悪いけど何か惹かれるからぜひうちで描いてみないかって言われて。えっ？ そりゃーもちろんオーケーしたよ」

一言も発せないでいる私の前で、彼女は一人で会話のキャッチボールをしていた。身振り手振りの大きな彼女は話すたびに上半身ごと絶え間なく揺れていたが、目だけはしっかりと私の目を見ていた。奇妙な光を含んだまっすぐすぎる視線は私の眼球を射抜いて頭ごと固定しているみた

いで、一度捉えられたら目を逸らすことができなかつた。

昨日とは別人のような和やかな口調と丁寧な化粧、一方で既視感のある貧乏くさいヘアバンドと不清潔な髪の毛に混乱し、何より彼女が今、私の部屋という見慣れた空間にすることも含めて全てのちぐはぐなコントラストにクラクラとめまいがした。

そのときピィ、と台所からやかんが鳴った。

「あ、お湯が沸いた沸いた。紅茶入れようね」

すばやく反応した江戸マイマイが立ち上がりズカズカと台所へ入っていったので、私も慌てて立ち上がり彼女の後を追う形で台所に向かう。

「ティーカップあるう？」

江戸マイマイが顎を触りながら戸棚をじろじろ物色している。ティーカップなんて洒落たものうちにはないので「いえ、あの、マグカップならあります。……あと湯飲みも」と答えながら爪先立ちになり、戸棚の奥からパンダが手を繋いで連なっている絵柄のマグカップと何かの景品でもらった安っぽい湯飲みを取り出して江戸マイマイの前に並べた。彼女はカップを見ると「パンダちゃん……」と感情を含まない声で小さく呟いた。パンダという言葉覚えてたての子供の独り言のようだった。

ぷしゅうぷしゅうとまだ息が荒いやかみを江戸マイマイが持ち上げ、並べたマグカップと湯飲みにお湯を注ぎ始めた。カップから湯気が広がる。袖がしぼられたデザインワンピースは手首まで覆っており、昨日ちらりと見た腕の刺青を確かめる余地はなかつた。お湯を注ぎ終わると、

ティーバッグをゆっくりと浸した。お湯に浮かんだティーバッグを彼女は慎重な仕草でちょんちょんと指でつついて沈めた。ゆっくりと広がる茶葉の色とともに江戸マイマイの手垢もお湯と混ざっていく気がした。

「あれ、ティーバッグって一個しかないんですか」

マグカップにだけティーバッグを浸したところで江戸マイマイが満足そうに腕を組んだので驚いて思わず聞いた。湯飲みに注がれたお湯は依然としてただのお湯のまま静かに湯気を立てている。すると江戸マイマイはきょとんとした顔で「え、うん、一個だけだよ」と答えた。

さてさて、一個だけなら差し入れの意味ないじゃんか。呆れを通り越して半ばおどけて心の中で突っ込みながら「たしか少し古いティーバッグだったらうちにもあったような……」と戸棚の扉を開けて探そうとしたら突然その腕をガシッと掴まれた。昨日手を叩かれた記憶が感覚として鮮明に蘇り、反射的に手を引っ込めギョッとして見ると、江戸マイマイはまるで「わかってないなあ」とでも言いたげに冗談っぽく首を横に振ってみせた。

「アナタねえ、わざと一個だけティーバッグを持ってきたんだよ、わかる？紅茶ってのは、同じティーバッグから作ったものを分け合うのがいいんだよ、お近づきの印にね。同じ釜の飯を食べるって言うじゃない？ワタシ、あの表現が昔から大好きでさあ……フフ、ねえ、わかる？」

へえ、わからない。ちょっとよくわからない。同じ釜の飯という言葉は知ってるし、たしかになんとなくあったかき言葉だなあとも思うけど、なぜそれを紅茶で実現しようと思ったのか全然わからないし、なぜ初対面の人間の家に一個だけティーバッグを持ってきているのか謎だし、そ

もそもえっとあなたは何だっけ誰だっけ。混乱しながらも私は「へえ……、まあ……」と口籠もり気味に肯定してしまう。こういうとき歯切れよくNOと言えないのは私の悪い癖だ。彼女は「わかってくればいいの」という感じでゆっくり頷くと、ティーバッグの紐をつまんでお湯につけたまま小刻みに上下させた。

「そういえばアナタの名前、聞いてなかったような」

えっ。本名って教えちゃっていいんだろうか、と一抹の不安を覚えながらも「馬場菜月です」と素直に答えた。

「さあて、頃合いですかな」

声を弾ませた江戸マイマイに、えっ？と思った。なんだ今スルーされた？私が名乗ったことに對しては一言もないまま紅茶の具合を気にしている彼女に開いた口が塞がらない。さすがに自分から人の名前を聞いておいてノーコメントとは信じがたい。江戸マイマイがさっき名乗ったときには「変わった名前ですね、あっ、でもかなり覚えやすくていいですね」とコメントまで返してあげたというのに、今のじゃまるで会話そのものが存在しなかったみたいじゃないか。聞こえていなかったのだろうか。いやまさか。この至近距離で、聞こえないわけがない。無視した？意図的に無視されたのか？

しかし彼女を見るとそんな思惑やじめじめした感情は一切感じられないような健やかな顔をしている。開封したばかりの炭酸水のような清々しさをまとっている。口元には嫌味のない笑みすら浮かべて、彼女はマグカップからティーバッグを静かに取り出すと、湯呑みにちゃぽんとつけ

た。波紋とともに黒っぽい茶葉の色が湯呑みの中に広がる。

「あんまり長く入れすぎるとアナタの分が苦くなっちゃうもんね」

ぼーっとしたまま頷きかけて再び、え？と思った。ちょっと待て。出漕らしの湯飲みの方が私なの？それって同じ釜の飯とかいう理想とは程遠い気が、

「ミルクとお砂糖はいる？いらないよね、紅茶はストレートが一番だよ」

当然のように差し出された湯呑みを両手で受け取ってしまい、混乱を包み込んだまま江戸マイマイのあとを追うように台所をあとにした。

閉じたカーテンの隙間から敷きっぱなしにしていた布団に朝日が細い線となって差し込んでいるのが見えた。ああ、朝だ、なんて間抜けなことを考えた。見える景色はいつもの朝のはずなのに、すべてに対して違和感がある。私と世界の境界に見えないけれど大きな違和感が横たわっている。自分の部屋の感触なのに現実味がない。足の裏を伝わる冷たいフローリングの感触も、慣れたはずのカーテンも、全てがよそよそしい。何もかも少しづつズレているような感覚。今すぐこの気持ちを誰かに伝えたい。調子が狂うなんてもんじゃない。奇妙なことなんて一つもないような態度で自分のペースで振る舞うひとつの生命体がこの空間に存在するだけで、まるで自分の方が頭がおかしいのではないかという気がしてくる。さては、夢か？私は夢を見ているのか？縫るような気持ちでこっそり頬をつねってみたが、痛いだけだった。小さい頃から夢の中で夢だと予感したときいつもしていたように白目をぐりんと剥いてみたりもしたが、目が覚める気配はなかった。

「さあ座って座って」

江戸マイマイはあたかも自分の家であるかのように私に座布団を勧める。その表情はにこやかで、どうやら私を怒らせようとしているわけでも、かといって私からのツッコミを待っているわけでもなさそうだった。適切な判断能力を失いつつある私は、言われるがまましおらしく座布団に座った。

「この紅茶ね、別に特別なものでもないんだけどね、近所のスーパーで買ったやつなんだけど、ねえ知ってる？こないだテレビで見たんだけどさ、イギリス人ですら本場の紅茶と日本のスーパーで売ってる紅茶、味の見分けつかないんだって」

彼女は笑いながら紅茶のカップの縁を指で撫でた。へえ、とかはあ、とかろうじて相槌を打ちながら、私も一口紅茶をすすってみせる。

ぬるい。

この紅茶、ぬるい上に薄い。江戸マイマイを見ると、猫背で口を尖らせて紅茶をすすっていた。全体的にいびつで変なシルエットだった。

「あ、そういえばっ」

唐突に大事なことを思い出した。「江戸さん、私のパンツは……」と尋ねると、一拍間を置いてから思い出したように「ああ」と言って彼女は口元に笑みを残したまま、妙に丁寧な仕草でゆっくりとマグカップをテーブルに置いた。そしてワンピースのポケットに手突っ込みごそごそし始める。まさか、と嫌な予感がしていると案の定目の前でポケットの中からずりりと取り出され

たのはむき出しの私のパンツだった。他人の手のひらで直に握られたパンツは恥ずかしそうに萎縮しているように見えた。

「これき、ちょっと気になったんだけど、履き心地ってどう？ワタシ、綿百パーセントのちょうどちんパンツしか持っていないから、こういうのってわかんないんだ」

履き心地を問われるとは。手渡されたパンツにおずおずと手を伸ばしながら「まあ……悪くはないですよ」と答える。ちょうどちんパンツって、もしかして小学生のときに履いていたような膨らんだデザインのやつ？ちらりとさっき見てしまった白いパンツを思い出す。

江戸マイマイは私に手渡したあとも尚、興味深そうに神妙な顔をしてパンツを見つめていた。いたたまれなくなった私はパンツを畳むふりをしながら、やんわりとテーブルの下に隠した。パンツに向けられていた視線がテーブルの死角によって断ち切られた江戸マイマイは、少し不満そうにゆっくりと顔を上げ、終始その顔を眺めていた私と目が合った。

「アナタ、最近夢見た？」

テーブルの上に散らかったお菓子の包みを触りながら江戸マイマイが言った。夢か。願わくば今この状況が夢であってほしいなとは思っているけど。

「いや、見た気はするんですけど、覚えてないです」

私もカントリーマームに手を伸ばす。夢は毎晩何かしら見ているはずだというが、よく覚えていない。バイトや飲み会のせいで昼夜逆転した生活をしている時期は夢をよく見る気がするけど、それでもどんな夢だったのかと言われたら何も思い出せない。夢は溶けやすい。目が覚めたら夢

の感触の延長も、現実と交わった瞬間あっさり飲み込まれてしまう。夢を見ていた、という感触だけが残っていることが多い。なんだか儂いなあとと思う。江戸マイマイは夢の研究をしていると言っていたけれど、実体のない夢を研究対象にするってどんなだろう。いくら夢を記録して文字のホルマリン漬けにしたところで現実の中では夢はただの夢だ。

「あ」

ふいに私が上げた声に、江戸マイマイが光を蓄えたぎょろついた目を向ける。

「そういえば、今日見た夢思い出しました」

「なになに」

食い気味に江戸マイマイが聞いてくる。その見開かれた目は底知れぬ好奇心で光っている。期待値がプレッシャーだ。そんなに面白い話でもないのに、言い出さなきゃよかったな、なんて少し後悔しながら「大した話じゃあないですよ」とはじめに断っておいた。

「ミカンを剥こうとしていたんです。どこか、教室のような所だった気がするんですけど」

江戸マイマイは私が話したすと妙に表情をこわばらせて、「剥いて食べたのですか？」と敵かな声で聞いてきた。

「いえ、食べたかったですけど、皮が厚くて全然剥けなくて。そしたら、誰だったか忘れたけど人が来て言うんです。『それはハッサクだから剥けないよ』って。だけど、その人がハッサクだと言ったそれは私にはハッサクには見えないんです。それがハッサクじゃないってことだけはなぜかしっかりわかっていたんです。なぜかはわからないけど。どうしてもそのミカンが食べ

たくて、そのために剥かなきゃならないんだけど硬くて指じゃ全然剥けなくてやけくそになっていたら目が覚めました」

あなたのピンポンラッシュのせいでね、と心の中で付け加える。江戸マイマイは私が話し終えると「ほーん……」と言って静寂に何度も頷いてから、「へえ、なにそれ面白い。今日のブログのネタにするね」と呟いた。江戸マイマイの言葉になんとなくホッとして、ホッとした自分に驚きながら「江戸さんの夢はどんな感じなんですか」と聞いた。

とたんに江戸マイマイは目を細めながら遠くを見つめて物憂げな表情になった。

「正直……何からどう話せばいいのかわからないな……」

これは長くなるのではなからうか、と身構えた。江戸マイマイは目を細めたまま語り始めた。

「たとえば、昨日はテープにうめき声が多く残ってたから悪い夢を見ていたんじゃないかなと思う。書いた記憶はないんだけど枕元のメモ用紙には『ラクガキ 埃のあだ名』って走り書きがしてあった。ラクトなんとかって書いてあった。五十八回寝返りを打っていたから昨晚はなかなかアクティブな方だと思う」

熱心に語るもののその語り方はどこか夢と距離があって、思っていたのとは少しズレた返答に私は首をかしげた。なんだろう、この違和感。私はそわそわと見るともなく部屋を見渡しながら、「埃のあだ名ってなんですかね。なにか覚えてないんですか」

と言ってから江戸マイマイに視線を戻した。すると彼女は今まで見たことのない顔をしていた。くしゃみを我慢しているような、吹き出すのを堪えているような、顔のどこか頬あたりをちょい

と突くとはみ出そうな両目から涙が溢れ出しそうな、掴みどころのない謎めいた感情でいっぱいにした目でこちらをただ見つめていた。

「ワタシ、今まで、夢を記憶として覚えていたことがないんだよね」

かすかに眉間に皺を寄せて片方だけの口脇を下げた彼女は言ったら悪いけど不細工な表情だった。えっ、どういうことですか、というセリフは声にすることなく胸の中から直接空気に触れて消えた。神妙な沈黙が流れる中、私は言葉を探していた。江戸マイマイは私になにか言うのを待っている気配だったが、やがて長い溜息をつくとおもむろに腕をまくり始めた。花柄の袖の下に隠されていた白い腕を見てギョッとする。その腕には何やら細かい字でびっしりと埋め尽くされていた。昨日刺青だと思ったそれはよく見るとマジックで書かれた『正』の文字だった。

「ワタシ、定期的に腕に正の字を刻むの。今日の前で起きていることが実際に起きていることが確かめるために必要なんだよ。夢の中でも書いてる。記憶としては覚えてないけど間違いなく書いてる確信だけはある。習慣にしているからね」

江戸マイマイは自分の言葉を確かめるようゆっくりしゃべった。彼女がゆっくり話すのを見るのは多分はじめてだった。

「だからね、書いた正の字が腕から消えたらそのときは夢から覚めたってこと。そのときは疑いのないことだと思っても、あとにならないとはわかんないからね。この文字は消えたり増えたりする。お風呂に入ると薄くなるし、汗をかくと消えかける。でもそういうことじゃないんだよ。そこじゃないんだよ。夢の中で夢だと確信することができないように、現実も現実の

中では輪郭を掴むことができないから」

なんと言ったらいいのかわからなかった。目の前の腕も、江戸マイマイの言葉も現実味がなく、本気で自分は夢を見ているのではないかと思えてきた。私はただ、腕に広がる無数の正の字を吸い寄せられるように見つめていた。書かれた文字はうごめいているように見えた。

「あっ、そうだ、お願いがあるの」

江戸マイマイが明るい声を出してポケットからゴソゴソとマジックペンを取り出した。そろそろ、ポケットの四次元性が疑われそうさ。

「アナタに書き足して欲しいの、ここに、正の字の一本線を」

差し出されたマジックペンを受け取ると、思っていたより重かった。その重さに怖気付く。

「ここに、ですか」

「うん。ほんとは好きなところでもいいんだけど、背中とか足の裏だと見えないし忘れそうだからね」

ケロリと言う江戸マイマイが差し出した真っ白い腕の肘の部分に、一つだけ未完成の正の字を見つけた。あと一本足りない。書くべきだろうか。狂気じみたこの行為は彼女にとって必要不可欠な作業だということだけはわかる。腕に正の字を書き足すということはその行為以上に深くつながらざるを得ないのではないか。しかし彼女の目は真剣だ。真剣そのものだ。大きな目玉いっぱい純粋な期待をこめて私を見ている。その無垢っぽさがかえって鋭く刺さる。

恐る恐るペン先を近づけ、皮膚に押し当てる。細胞に黒いインクが染み込んでいく。巻き込ま

れていく。私という存在が彼女の現実に混ざり合い巻き込まれていく感触がする。正の字の底部分の一本線を書き終えて顔を上げると、思いのほか近くに江戸マイマイの顔があった。目が大きすぎるせいか目元には細かな皺が多かった。さっきまで見えていなかったところまで見えてしまうようなまなましい感覚。

「よかった、宙ぶらりんだった正の字がようやく安定したね」

さわやかに笑う江戸マイマイはカーテン越しの朝日の光を背中にうけて眩しかった。感情が追いつかない。漠然とした予感だけがある。

(文学部総合人間学科四年)

おさむじやない

岸 燃料

恋愛は、チャンスではないと思う。私はそれを、意志だと思う。

太宰治

1

ATMが吐き出した通帳を見て、思わず溜息を吐いた。

そこには、奨学金が足され、家賃が引かれ、光熱費が引かれ、なけなしのアルバイト代だけが残っていた。母とは喧嘩して大学に進学したから、仕送りは一銭もなかった。それに加えて、書類を揃えることができず、授業料免除の申請をすることもできなかった。

来月には、二十七万円の授業料の引き落としがある。憂鬱だ。

顔を上げると、後方確認用に取り付けられたミラーが、僕を不細工に映し出していた。その後ろに人が並んでいることに気付いて、急いでいる素振りを見せながら、九千円を下ろした。

銀行を出ると、生温い湿気が全身を包んだ。

六月の正午の空模様は僕を陰鬱とさせる。空には、湿っぽい灰色の、よじれた腸管を思わせる雲がうごめいていた。雨はまだ降っていない。

ポケットからイヤホンを取り出し、それをスマホに差し、ベーターペンの「月光」で耳を塞いだ。物静かで寂しげなメロディが夜を連想させる第一楽章は、世界を美しくみせてくれた。

卒業するために必要な単位は、残り僅かになった。今履修している五コマは、なるべく家に引き籠らないように全部違う曜日にした。朝は弱かったから、昼すぎにある科目だけ取った。

ふと一年後の自分を想像する。

普通のサラリーマンとして、一生を終えるのだろうか。普通ってなんだろう。僕にとって、当人は就職先を決めることだった。一週間後にある最終面接を思い出す。面接官と対面する前に、扉を三回ノックする自分を想像する。大丈夫、きっとうまくいく。

耳元で鳴る美しいピアノの音を超えて、笑い声がいくつか通り過ぎた。手に持ったビニール傘が地面を衝く音は、一定の間隔を保って聞こえる。自分よりもビニール傘が少し前を歩いているような感覚で、それは黄色い点字ブロックの上を歩きたがっているように思えた。

静寂が流れて、ぽつんと、雨が、腕に触った。

耳では、第二楽章が始まった。一輪の花を思わせるような軽やかで楽しい雰囲気、右手の音たちと左手の音たちが冗談でも言いあいながら戯れているように感じさせる。

ビニール傘を広げると、ぽつぽつと、雨粒が当たる振動が微かに伝わった。

雨は地面を濡らし始めている。靴が濡れてしまわないかと心配していた。長く履いている靴だけれど、見た目はまだ綺麗だ。靴底の溝も、小石を捕まえてくるぐらいにはつきりしている。

誰かに話しかけられた気がして、イヤホンを外した。

「脇山、それ何を聞いているの？」

落ち着いた声、それに苗字を呼び捨てで呼んでくるのは、吉村誠ぐらいしか思い浮かばなかった。入学式で話しかけられて以来、同じ法学部ということもあり、仲良くしている。特に共通の趣味はなかったけれど、大学では唯一の友達といえる存在だった。

「何も聞いてないよ」とものうそうに答える。

「はいはい。本当は？」

吉村は、僕の性格をよく理解している。天の邪鬼な性格からか、なんとなく最初に明らかな嘘を吐きたくなる。冗談が通じない吉村も、流石に慣れてきたらしい。

「あいみよんだよ」

僕はまた嘘を言っていた。

「本当に何も流さずに、イヤホンをしてたの？」

おそらく「本当だよ」と聞き間違えたのだろう。僕もまた、吉村のことをよく理解している。吉村は僕が喋ったことをよく聞き返してくるし、嘘みたいな聞き間違えをよくする。

「あ、い、みよ、ん、ね」

吉村の顔をみて、一音ずつ確認するように言った。

「あっ、あいみよんか」

吉村は満足そうだった。

「今日から梅雨入りだっけ？」と吉村は続けた。

「確か、そう言ってたね」

ビニール傘に当たたる雨音は、無秩序に重なって、何も放送されていないチャンネルに流れる砂嵐のようなノイズを作っていた。アスファルトから上がってくる雨の匂いもだんだん強くなって、走る車の音も湿ってきた。僕の靴はまだ湿っていないようだ。

「そういえば、夜中の火事、不審火らしいよ」

「え、この近く？」

昨夜家から聞こえた消防車のサイレンを思い出していた。

「そう。テレビでもやってたけど、不審火って怖いね」

「煙草吸い始めたばっかりの大学生が、不始末でも起こしたのかと思ってた」

大学生になって、煙草を覚える人は多い。僕が毎朝飲むコーヒー牛乳と同じようなものだろうと思う。でも、そのお金はどうしているのだろうか。家賃や授業料を親に負担して貰いながら、自ら選んだ学業やアルバイト、サークルのストレスを解消しているのだろうか。

「放火だったら、怖いよね」

「放火じゃない？ 不審火ってほしい」

思わず、疑問を口にしたところで、学校の敷地内に入った。

三限の終わりを告げるチャイムが鳴った。

講義まであと十五分だ。

あちこちに水溜まりができていて、雨粒が模様をつくり、どれもが深く見える。

吉村は流行りのアイドルグループの話をしているように聞こえるけど、雨音でよく聞こえないから、適当に相槌を打った。この調子であと一時間も降り続ければ道が川のようになり、建物が孤島のようになってしまうんじゃないかというくらい激しい雨になってきた。

「うわ、靴下までびしょ濡れだよ」

法学部棟につくと、吉村の顔から不快感が伝わってきた。

吉村の靴をみると、黒の上に更に墨汁を垂らしたような色になっていた。僕の靴も湿り気を感じるけど、水溜まりに気を付けて歩いていたおかげで、靴下まで濡れずに済んだようだ。

「じゃあ、また」

吉村はそう言って、僕とは違う教室へと向かっていった。

教室に入ると、いつも自分が座る席が空いていることを確認した。

学年が上がるにつれ、講義を受ける教室がだんだん狭くなってきて、この教室もそれほど広くなかった。しかし、毎年落とす人がいないと専ら噂のこの講義には、溢れんばかりの人がいた。

僕はいつもと同じ前の方に座った。

今日はいつもより話し声が聞こえる。後ろの女子は、大学近くでの不審火について話していた。窓を閉め切っても聞こえる雨音は、だんだん大きくなっている。

腕時計をみる。

あと五分で講義が始まる。

僕は、入口を見つめていた。教室に入ってくる人を見る度に、胸がぞくぞくと躍る。すると、少し濡れたようにみえる髪を気にしながら、彼が入ってきた。

息が止まる。さっきまで聴いていたピアノソナタの第三楽章が流れ始めたかのように、体内で飼っている生き物が暴れ始める。

芦屋だ。

眼鏡をかけないと黒板の字も見えない視力でも分かる。自分でも、彼かその他かを、何で見分けているか分からなかった。確かに、歩き方には特徴があつて、着る服も見飽きるほどしかなかつた。しかし、彼が視界に入るだけで、胸の奥が熱くなつていくのを感じた。

彼は、僕のふたつ前に座つた。

気怠そうに、オレンジ色の筆箱、指定された教科書、ノートを取り出す。日焼けした細い腕には似合わない少し大きめの腕時計で、時間を確かめる。そして、彼の手には大きすぎるスマホで何かを確認している。その指は、文字をフリック入力しているように見えた。彼と気軽にメッセージをやり取りできる誰かに、胸がきゅっと締め付けられる。

四限が始まるチャイムが鳴った。

雨の音が響く教室で、胸の奥で流れるピアノの音は激しさを増していた。

2

僕はその横顔に憑かれていた。

彼はいつも、空席が目立つ広い教室の中に、ひとりで、ぼつんと座っていた。

入学直後は、新入生同士が親睦を深めるために、さまざまな企画が開かれていた。けれど、そういうイベントが得意ではなかったから、いずれにも参加したことはなかった。そのせいもあって、名前も知らなかったけれど、彼を見かけるたびに話しかける接点を探していた。

人が座る動作に追従して動く講義机椅子が鯛の缶詰みたいにぎっしり並ぶ大講義室は、途中で抜ける学生が立って椅子が戻る音を響かせた。それを気にすることなく、彼はメモを取っている。教員の前にある大きな教卓、そしてその前に彼がひとり座っていた。

それは一目惚れだった。

身長は僕と同じくらい低く、ラファエロの描いた天使のように無垢な顔に見えた。僕は彼のすぐ後ろに座ると、どうしてもそれに触れてみたいという衝動に駆られた。それは見るからに滑らかで、赤ん坊の肌のようなだった。服には飾り気がなく、それが僕を夢中にさせた。

僕は、意味もなく、彼の横顔を見つめる。

下を向いて忙しそうにスマホの上で指を躍らせる冴えない男子、起きていることが珍しいくらい

い寝ている女子、彼はそれら一切のものと同関係もなく前を見つめていた。

しかし、彼の名前を知る術はなかった。

同じ学年、同じ学部、そして同じ性別だということしか分からなかった。学籍番号で機械的に振り分けられた少人数で受ける語学でも一緒になったことがなかったから、名前を五十音で並べると前半にくるだろうという推測はあった。

名前が羅列された紙が大学の掲示板に貼り出されていた時、それを穴が開くほど見た。

最初は、その名前を見るだけでわくわくして、そこから何か楽しいことが始まる予感さえした。それは思い込みに過ぎず、名前の横に示されたランダムに振り分けられた演習も終わり、初めての定期試験を迎えるころには剥がされていた。

夏休みが始まると、一日一日が単調に明け暮れた。

外を見れば、何を考えても直ぐ蒸発してしまいそうなほど暑い毎日が続いていた。窓を開けてみれば、湿度の高さに嫌になった。机に広がった本はいつまでも同じ顔をしている。

何かをする気力もなく、何かを考える気力もない。

それでいて脳裏に浮かぶ映像が、とりとめもない聯想の糸に繋がって、過去の記憶へと僕を誘う。そのどれもが暗かったが、死を想像すれば落ちついた。

高校の頃に夢みたキャンパスライフは、こんな状態を指すのではない筈だった。

インスタグラムを見ると、高校の同級生たちは輝いていた。

男女のグループで、海をバックに水着姿の写真。マールイオンが吐き出す水を飲んでいるよう

にみせる写真。賞状とトロフィーをもって、満面の笑みを浮かべる写真。どれもが、僕にとって暴力的だった。大学生の普通を見せつけられているようだった。

自分が挙げている写真を確認すると、この前食べたラーメンの写真だけがあつた。初めて自分で稼いだ金で食べた高揚感から、載せた写真だった。恥ずかしくなって、削除した。

生きるのが嫌になって、練炭を通販で買ってもみたが、いざ荷物が届くと怖くなってクローゼットにしまった。することもなく、ただ物憂い倦怠の中にいる時に考えるのは、いつ普通の人生から足を踏み外してしまったのかということだけだった。

3

本多智朗、——僕が初めて好きになった人だった。

一番仲良くしていた頃の本多を思い出す。人は見かけによらずというが、見かけ通り優しかった。そのせいか、おじいちゃんというあだ名で呼ばれていた。本多は、かっこよかったわけでもなく、そこらへんに幾らでもいそうな顔つきだったが、目が澄んでいた。

初めて出会ったのは、中学三年の時に通っていた塾だった。

中学では吹奏楽に明け暮れる日々だったこともあり、引退後に悪い成績を母から心配され、そこに通うようになった。小さい塾だったけど、地元ではかなり有名な塾だった。

その塾は成績で二つのクラスに分かれていて、本多とは違う中学だったけど、僕たちは同じ下

のクラスに振り分けられていた。秋に受けた模試のあと、本多はその塾をやめてしまった。どうやら両親が厳しく、遠くの有名な進学塾に通うことになったらしいと人伝に聞いた。

中学を卒業して、家の近くではなく、少し離れた高校に通うことになった。

そこで本多と再会して、偶然同じクラスになった。

友達がいなくて困ったように席に座っていた本多に、僕は積極的に話しかけた。

高校から見ても、僕たちの家は同じ方角にあったから、いつも一緒に行った。試験期間で部活がない日には、必ず一緒に帰った。雨の日には、僕の母が本多も一緒に乗せていってくれた。

本多とは、誰も寄せ付けないほどに仲良くなった。

二年に上がる時には、文理選択があつて、本多は理系を選ぶだろうと思つて、それに合わせた。特進クラスが用意されていたから、学年が上がっても同じクラスになることができた。

お互い部活に打ち込んでいるだけあつて、休みの日に会うことはなかったけれど、一度だけ本多の家に遊びにいったことがある。

あれは高校二年の、八月だった。

初めて入った二階にある本多の部屋は、妹の部屋と隣り合わせになっていて、簡易的な仕切りがあるだけだった。ほとんど自分の部屋に引き籠っている僕にとって、プライバシーというものがまるでないように感じた。

「部屋に友達がくるの、治が初めてだよ」

治と書いてハル——。必ず初見で、オサムと間違えられる。

父から一文字取って、読みまで引き継いだ名前だった。この名前が心底嫌いだったが、本多か
ら呼ばれると悪くもないように思えた。

「そうなの？ 迷惑だったかな？」

「お母さんは他人が家に入るの、すごく嫌がるんだけど、治のお母さんには雨の日に送ってもらっ
たりしてるから是非って」

「ありがとう。はるえちゃん」

会ったことのない有名人や偉人を急に下の名前で言うのは、僕の持ちネタだった。中学の時、
聖徳太子のことを「あっ、たいしのことね」と言ったら、周りから「友達かよ」って爆笑されて
以来、味を占めてよく使っていた。

本多も笑いながら、「お母さんとは、友達じゃないだろ」と言った。

本多はなんでもすぐに笑うから、一緒にいて心地よかった。

それから、夏休みの課題を二人でやった。その日は、本多の祖父母が一階に
いるのは僕たちだけだった。制服か体操服を着た本多しか見たことなかつたから、いつもと違
う部屋着の本多に、妙な高揚を感じていた。

話すようになって一年半しか経っていなかったけれど、本多のことは全て知った気になっ
ていた。男子高校生特有の猥談をしても、本多は何でも話してくれた。

その日、ふざけて本多の股間を触った。本多がスウェットを履いていたこともあって、その形

が明瞭に手に伝わってきた。それに、勃起していた。

「なんで、たってるの？」と僕は聞いた。

「治が触ったからだよ」

「触る前からだよ、おじいちゃんでも勃起するんだね」

「うるさいな」

そう言って、本多は特段嫌がることなく、笑っていた。

「キスしていい？」

少しおどけて、言ってみた。

「初めては女の子がいいかな」

僕が男だから断られたことに違いなかったが、初めてじゃなかったらいいのか、とポジティブに受け取って、自分を誤魔化した。

「冗談だよ」

僕がそう言うのと、一階から「ともくん」という声が出て、本多は下に降りて行った。そして、本多の祖母が切り分けてくれた林檎を二人で食べた。

蜜がぎっしり詰まっていた、瑞々しい果汁が口いっぱい広がった。

薄水を踏むような会話もそれっきりで、夏休みが終わってからも、僕たちは変わらず、一緒に学校へ行き、次の授業がある教室に移動するときも行動を共にしていた。

その時は、頭の中にある細胞がふるえるほど、何事にも打ち込むことができた。

そんな毎日は、突然終わった。

高校二年の文化祭で、ほんの些細な事で仲違いをした。それまでも何度かそういうこともあったから、その時もまた元通りになれると思っていて。しかし、本多に何度メールをしても、返信がくることはなかった。

いつも一緒にいた僕たちが急に話さなくなったから、クラスメートからは不思議がられた。

「なんで喋らなくなったの？」と聞かれても、「なんとなく」という曖昧な返事をしてきた。共通の友達が本多のことを探ってくれてみるみたいだったけど、ただ聞き流していた。気が滅入ってはいしたが、それでもいつかまた喋れるようになる日がくると信じていた。

「本多が、脇山のこと、ホモだから話さなくなったって」

そう言ってきたのは、隣のクラスの山崎だった。友達から「男が好きなの？」と聞かれたことは何度もあったが、その度に適当に否定して、やり過ごしていた。好きな女性アイドルを用意して、その大きな胸に憧れを抱いているとアピールしていれば疑われることも少なくなった。しかし、その時は何も言い返せず、世界の全てがどうでもよくなる感覚だけが残った。

僕は、学校を休みがちになった。それでも、「中学までとは違って高校は留年するぞ」と担任の数学教師が脅してくるから、最後の授業だけでも出席するようにしていた。

学校にいくと、近くのドラッグストアで、適当に目についた風邪薬を一箱買うようになってい

た。心に限界を感じたら全部一気に飲んでやろうと思っていた。

その日は、雨だった。試験期間で、部活は休みだった。

いつものようにドラックストアに行って、千円くらいの風邪薬を買って、母の迎えを待っていた。少し時間があつて、うろついていると、本多が山崎と一緒に歩いているところに出くわした。二人とも僕に気づいていたのに、一瞥することなく、通りすぎていった。

その時、表面張力でぎりぎり溢れなかったコップに水滴が足されたような感覚だった。

そのままトイレの個室に向かい、さっき買った箱から出した錠剤をバッグに入れていた。ペットボトルの水で全部飲んだ。それだけで、健康な高校生の身体を狂わせるのに充分だった。

頭痛がして、耳鳴りも聞こえるようになり、動悸がした。

車の中では、母に悟られないように必死だった。

自分の部屋につくと、これまで集めていた大量の錠剤を意識が続く限りひたすら飲み続けた。これから死のうとしていることを忘れるほど、意識が朦朧とした。

そこから目覚めたのは、二十時間後だった。

目の前には知らない天井があつて、腕には点滴の針が刺さった状態だった。

どうやら、夕飯時になっても降りてこない僕を心配して部屋に見に来た母が、救急車を呼んだみたいだった。母は、しつこく「何かあったの?」と聞いてきたが、無性に腹が立った。普通の母親なら、色々察してくれるものだろうと思った。

僕は、さらに学校に行くことがなくなった。

担任からは高校二年で受験できる大学も紹介してもらったが、どうせ受からないと思って断った。それまではずっと皆勤だったこともあって、三年には進級することができた。

そして、なぜか特進クラスのままであった。

結局、三年では出席日数が足りず、その年に卒業することはできなかった。本多のいない三年生をもう一回やるか悩んではみたものの、気が向かなかった。

僕は高卒認定試験を受け、普通より一年遅れて、地元国立大学に進学した。

4

芦屋智朗、——初めてこの名前を見つけた時は、心臓が止まりそうになった。

羅列された名前のほとんどが、音の響きだとか、画数だとか、大なり小なり練られたものだろうに、この名前だけが僕の目を何度も往復させた。なぜ「友朗」でも「智郎」でもなく、「智朗」なのだろう。神様の悪戯だとしたら、それは悪趣味のように思えた。

それが、いつも目で追っていた彼だと知ったのは突然だった。

その日は、家から近いという理由で選んだコンピニアルバイトをしていた。いつもは夕方以降

にしか入らなかつたけれど、早朝で働いていた大学生がバックレたことで、店長に頼まれた穴埋めで朝早い時間から入っていた。

いつものようにレジに置かれた商品のバーコードを通して、ポイントカードを読み取ろうとした時だった。そのカードの裏に活字のように整った文字で書かれた「芦屋智朗」を見て、激しく動揺した。見上げるとそこには見慣れた顔があった。顔を正面から見たことがなかったから、人違いかとも考えたが、特徴ある歩き方と見覚えのある服装で彼だと確信した。

それから何度か早朝の時間帯に入って、よくカップ麺とエナジードリンクを買うことを知った。

そのアルバイトも、先月辞めた。

そこでは深夜帯に働く外国人がよく遅刻することもあって、シフトの時間を超えて業務をすることが多かった。それに加えて、勤務が終わる時間に決まって搬入される弁当やおにぎりのせいで、三十分の残業は当たり前だった。それでもお金には困っていたから、残業して給料が増えるならそれはそれでいいと思っていた。

一年経って、そのアルバイトでは最古参になっていた。いつものように吉村とアルバイト先の愚痴を言い合っていると、実際に働いた時間と給料が合わないことに気付いた。

その時は怒りで全身が熱くなり、店長に『もう辞めます』とだけメッセージを送った。

『なんで?』と返信が来たのは次の日で、正直に伝える気力もなくて『学業が忙しいので、すみません』と返した。そのあと『あと三カ月は居てほしい』と言われ、やり取りが続いているこ

とが面倒に思っ『わかりました』と返信した。

五月最後の勤務を終えると、店長から『来月のシフト希望表、出しといて』ときていた。月の最終日にしか伝えられないシフトも、不満だった。僕は、日付の横にある四角い枠にバツを三十九個並べて、店長の机に置いた。そして、店長の携帯番号を着信拒否にした。

帰り道、道中で死んでいた鳥もいなくなっていて、全てが精算されたみたいで清々しかった。

5

朝、鳥の声にふと目が覚めた。

急いでカーテンを開けると、それは青空の彼方へ消えた。

いつもより早くセットしたスマホのアラームは、鳴る前に止めた。寝癖を直し、丁寧に髭を剃る。スーツを着るのは嫌いだったけど、もう慣れていた。ネクタイも、インターネット検索することなく締めることができるようになった。昨日念入りに磨いた革靴を履いて、家を出た。

電車に乗りながら、何度も志望動機を反芻した。

最終面接がある本社の建物をみると、そこで働く一年後の自分を想像できた。控室を案内されて、そこで深呼吸をした。大丈夫、きっと上手くいく。

時間になると部屋の前に案内されて、扉を三回ノックした。

「失礼します」と続けて、扉を開けると、五人の面接官が座っていた。

思ったより、緊張はなかった。三日前から、想定される質問をいくつも用意して、何度も練習をした。企業のホームページから役員の顔を見つけ、スクリーンに映ったその顔に笑みを浮かべながら喋り続けたおかげかもしれない。

簡単な自己紹介をし、「本日はよろしくお願ひします」と言って、用意された椅子に座った。

五人全員が、こちらを懐疑的な目で見つめている。

これが何度目の面接か、数えるのも難しくなってきた。今までアルバイトの面接しか受けてこなかったけど、その場で採用されることがほとんどだったし、人並みには喋れると思っていたから、初めて不採用のメールを見たときはとてもショックだった。

いくつもエントリーシートを送ってはみたものの、高校を辞めたことに起因するのか、いわゆる学歴フィルターなのか、単に志望理由に魅力がなかったのか、ほとんどが面接にすら進めなかった。そんな中で、最終選考に進めたのがここだけだった。

最初に志望動機を聞かれ、いくつか簡単なやり取りが続いた。覚えたことを機械的に言っているように聞こえないか心配だったが、アドリブで変なことを口走ってしまうよりはマシに思えた。「差し支えなければ、高校を辞めた理由を教えてくださいませんか？」

僕にとって、これは典型的な質問だった。枕詞として「差し支えなければ」があったりなかったりするが、これに答えなければ間違いないだろうと思っていた。

「はい。体調がすぐれない日が多く、療養しようと思ったからです」

家族や病気のこととなると深く聞かれなことが多かった。

「この仕事は、結構体力いるけど大丈夫ですか？」

「もちろん、大丈夫です」

「体育会系の部活などはしていましたか？」

「吹奏楽部に入っていましたけど、中学の時はマーチングもしていました」

面接官が少し首をかしげたような気がした。

少し間をあげて「ありがとうございます」と笑みを浮かべると、横に目配せを交わす。

左端の面接官が続ける。

「ここ最近で、気になったニュースはありましたか？」

「はい。先日あった煽り運転による事故です。一つの重大事故の背後には二十九の軽微な事故、

その背景には三百のヒヤリハットがあると言いますが、煽り運転を減らすことは社会全体での安全運転に繋がると思います」

「具体的に、どうしたら煽り運転は減らせられると思いますか？」

「ドライブレコーダーアプリが一つの手段になると思っています。例えば、アプリ起動中に急発進、急ハンドル、急ブレーキを検知して、その前後の動画をアプリ内に記録したりするようなことは有効ではないかと思っています」

「なるほどね。ありがとうございます」

面接官の反応は良いとも悪いとも言えなかった。

「以上で、面接は終わりになりますが、最後に何か言いたいことはありますか」

「ぜひ、御社で頑張りたいと思っていますので、何卒よろしくお願いします」

御社、という言葉も言い慣れてきた。最初は背伸びしているようで口にするに抵抗があったが、その感覚もなくなってきた。採用されるかどうか分からなかったが、これで就職活動が終わるかもしれないと思うとほっとした。

「無事、採用ということになりましたら、本日十九時まで電話をします。もし電話がなければ、ご縁がなかったものと思ってください」

人事担当の人からそう伝えられ、本社をあとにした。

家に帰りついたのは十四時だった。

梅雨入りしてから降り続いていた雨も嘘みたいに晴れたせいで、部屋はサウナのようだった。エアコンで部屋を冷やし、スーツを脱ぎ捨てた。汗みどろになったあとのシャワーは、格別だった。浴室を出ると、冷房十六度の風が涼しかった。脱ぎ捨てられたスーツとワイシャツが、まだどこか人の形を残していた。

芦屋を拜める唯一の講義に行けなかったことを考えていると、十七時を回っていた。

何をして落ち着くことはできず、ちまちま続けているスマホゲームをしながら、それが着信画面に変わるのを待つことにした。日課のように熟している作業も、あと数分すれば人生が大方決まるかもしれないと思うだけで、手に汗を感じた。

十八時を過ぎてからは、スマホを机の上に置き、正座して見つめていた。今順番にかけている人事担当者が、自分の携帯番号を一桁ずつ確認している姿を数分おきに想像した。時間が過ぎるのが、いつもの二倍にも三倍にも感じた。

結局、十九時になっても、着信がくることはなかった。

日付が目に入り、今日が誕生日だということを思い出した。全てがどうでもよくなるような人生の敗北感があった。

6

死のう。

死ぬなら、今日だと決めていた。

クローゼットの奥に眠っていた段ボールを引っ張り出す。それを開けると、段ボールの大きさに似合わない丸い形をした七輪が綺麗に梱包されていた。

これを箱詰めした人は、のんびり肉でも焼くところを想像していたのだろうか。いや、違う。きっと、やりがいもなく思考を止めて、倉庫内から探して、とにかく次から次へと商品をひたすら段ボールに詰めていたのだろう。それが、大量に注文されているであろうアダルトグッズのほうに気をとられていたに違いない。

呼び鈴が鳴った。

息を潜める。

こんな時間にくる人物に心当たりがなかった。ここに住んでから、来客は一度もなかった。もしかしたら、誕生日を祝いに吉村がきたのかもしれないと考える。そんなはずはなかった。吉村は僕の家の場所を知らなければ、今日が誕生日ということも知らない。それに、サプライズをするような柄でもない。

誰か確認してみようと、ドアに近づく。

ドアスコープから外を覗こうと顔を近づけた瞬間、ドアをノックする音が出た。声が出そうになって、掌で口を覆った。悪戯がばれた子供のように、心臓がばくばくと脈を打つ。

また、呼び鈴が鳴った。

僕の心臓が立てているリズムにそぐわないほどゆっくりだった。

おそるおそる覗いてみると、帽子を目深に被った男がうつむいて立っていた。顔は見えなかったけれど、知らない人という確信をもつには充分すぎる雰囲気だった。

音を立てないように気を付けながら、ドアから離れた。

頭では、心当たりがある人物を探していた。

家賃も、光熱費も、遅滞なく払っている。NHKの受信料だって、入居した日に契約して以来、払い続けている。これから死のうとする人間にしては、上出来じゃないかと感心する。

宗教勧誘か？ いや、神の存在なんて信じていない。それに宗教勧誘といったら、年配の女性というステレオタイプな思い込みがあった。誰だ？ 不審者か？

あの怪しい男は諦めて、どこか行っただろうか。

そんなことを考えながら、再び、おそろおそろ外を覗く。

誰も、いなかった。

今度こそ、邪魔は入らない。

七輪の練炭を見つめる。

見ていると、ひとつひとつが消したい過去のように感じた。

僕には、それ以外何もなかった。道端に咲く花の名前も知らなければ、視力の悪い目でも見える星の名前も知らない。外で鳴いている虫の名前も知らない。休日に会う友達もいないし、約束を待っている恋人もいない。頼れる家族もない。内定もなければ、お金もなかった。

入学して買った本棚に、六法と法律入門書が並んでいる。

どうして友達がいらないのか、と思う。

何故、誰も止めてくれないんだ。

おせっかいな友達がいて、鬱陶しいくらいに気にかけてくれて、とても自殺なんて考えられない環境だったら死んだりしないかもしれないのに、スマホの通知音さえ鳴らない。

この世の中が憎い。

僕に友達がいらないのも、内定がないのも、同性を好きになってしまっただけ勝手に傷つくことも、

僕が悪いんじゃない。贅沢なんて望んじゃいない。普通になりたかった。

僕にこんなことをさせるのは、この世の中のせいだ。

そうだ、だから仕方ない。

毎年この国では三万人近くの人が自ら命を絶つ。実際には死にたいと思っても死ねない人ばかりだ。その証拠に、インターネットの掲示板には大量の「死にたい」が溢れている。一人の自殺の裏に、二十九人の自殺未遂、そして三百人の「死にたい」があるとすれば、八十七万人の自殺未遂、そして九百万人の「死にたい」が毎年あるということだ。世の中が狂っている。

僕は何も悪くない。本当だったら死にたくない。それでも、自分の夢を実現させていく人を横目に、日々消耗していく自分を想像する方が怖い。

階段を上る音とともに、楽しそうに話す男女の声が聞こえた。その声を聞きながら、浴室の換気扇を止め、練炭が入った七輪を浴室に持ち込んだ。

ひとり暮らしを始める時に使ったガムテープを、勢いよく引っ張り出す。スーツを破るような小気味よい音が響いた。換気口、排水口、最後にドア枠を目張りした。シャワーを浴びて五時間は経っていたが、少し湿り気を感じた。

あとは火をつけて睡眠薬を飲めば、こんな人生も終わるのに、といざ死が目前に近づいたら、体が石のように固くなって、動けなかった。身体中が凍ったように立ち竦む。神も仏もないこの世界も、この不幸な道しか用意されていない人生も、今日で終わりだ。

意志は固かった。

火災報知器の、けたたましい音が鳴り響いた。

7

わけがわからなくなる。

どうして、このタイミングで鳴るのか。あまりにも早い。僕は火をつけていないし、何しろこの空間には火災感知器さえない。なぜだ。もしかして、このアパートで火事が起きたのか。

一週間前の不審火と、帽子を目深に被った男が頭をよぎる。だとしたら、僕はこの目張りされている浴室で、身が焼ける恐怖とともに最期を迎えるのか。身体が激しく震え、ドア枠に貼ったガムテープを夢中になって剥がした。何重にも目張りしたガムテープが腕にまとわりついた。

僕は声の限りに叫んでいた。腕に絡まったガムテープを浴槽に投げ捨てていると、唇の端が塩辛いことに気付いた。

僕は泣いていた。

涙が止まらなかった。

玄関から出るとサイレンが鳴り響いていた。

涙はまだ収まらず、外の空気が顔に触れた途端、全身を安堵が包んだ。同じ階の人は、誰も出

てくる気配がない。靴を履かずに外に出たものの、誰も避難しそうにないので、安堵が不安に変った。とりあえず、握りしめていたスマホで、一一九に電話することにした。

「一一九番消防です。火事ですか？ 救急車ですか？」

「あっ、夜分遅くにすみません。火災報知器が鳴っています」

涙声になっていたけれど、向こうは気付いていないようだった。

「鳴っていますね。聞こえます。煙は見えますか？ もしくは煙たいですか？」

「煙はありません。今のところ、煙たくもないです」

「そうですか、誤作動だと思いますが向かいますので、住所を教えてくださいませんか？」

「え、誤作動？」

「この時期は多いですよね」

馬鹿馬鹿しくなった。傍から見れば、僕はサイレンの音に驚き、泣きながら外に出てきたいいい歳をした男でしかなかった。

涙は完全に乾ききっていた。住所を伝え、「外で待っていた方がいいですか」と聞いた。

「いえ、家の中にいて結構ですよ。今向かっていますのでお待ちください」

サイレンが鳴っているのに悠長に家の中に居てもいいのだろうか、と疑問に思いながら「ありがとうございます」とだけ言って、電話を切った。そうして、自分の部屋に戻ろうとした瞬間、隣の部屋のドアが開き、僕は心臓が止まりそうになった。

芦屋だった。

むこうも驚いた表情を浮かべ、こっちを見つめる。

「誤作動したみたいですが、多分」

僕はなるべく表情が顔に出ないように言った。

「あっ、あし」

彼は、僕が素足で部屋から出たことに気付いたみたいだった。

「びっくりしちゃって」

僕は、誰にでも見せる作り笑いを浮かべていた。彼も、笑みを浮かべているように見えた。彼の顔の輪郭はぼやけていて、明瞭な線として認識するほど見つめることができなかった。

困った表情を浮かべているであろう僕に、「怖いから部屋に一緒にいてもいい?」と彼は言った。少し驚いたが、さっきまで僕がしていたことを思い出した。

散らかった部屋を気にする素振りを見せて、浴室の扉を閉めた。そして、彼は「お邪魔します」と言っ、茶色いクロックスを脱いだ。

「電子レンジかけ始めたら鳴って、俺のせいかと思ったんだよね」

距離感をはかるような口調だった。

緊張から、顔を見ることはできなかった。

「とうか、同じ法学部だよね? お隣だったんだ」

必死に会話を繋げようとして、口を滑らせてしまった。これは知らない体で仲良くして、話しているうちに偶然同じ学校同じ学部だと気づいて、仲良くなる方が良かった。向こうは僕を知ら

ないはずだし、知りながら近づいてくれたかもしれないという妄想に入り浸りたかった。

「あっ、知ってるんだ。脇山くんだよね？」

予想だにしない返答だった。

「知ってくれてたんだ」と、冷静を装って言った。

「高校の時の担任と同じ苗字で、それで」

「えっ、本当？」

サイレンがまだ鳴り続けている。この状況が、とてもシニールに思える。彼が僕を知ってくれていたことからの高揚を隠してくれているようだった。

「あっ、太宰治」と机上の文庫本を見て、彼は言った。

「おさむ好きなんだよね」

「いや、おさむって」

彼が笑う。

初めて聞く彼の笑い声が、僕は嬉しかった。

「今日って、桜桃忌だよね」

「詳しいんだね、ちなみに僕の誕生日でもあるんだよね」

また、余計なことを口走ってしまった。なぜ好きという感情は頭を悪くさせてしまうんだろう。

「えっ、一日違いだ。俺は明日なんだよね。あっ、おめでとう！」

大学生になって初めて他人に認識された誕生日、「おめでとう」と言われたことに純粋な喜び

を憶えていた。必死に冷静を装いながら「ありがとう」と返した。めまぐるしい感情の変化に脳がついていかず、明日が彼の誕生日だということには適当な返事が思い浮かばなかった。

サイレンが一向に鳴りやまないのです、僕たちはベランダから外を確認した。

アパートの住民が避難しているのと、野次馬が見えた。それを見た僕たちは途端に不安が募り、下に降りて避難することにした。

階段を降りると、消防士と警察官がみえた。

警察官は通報した人に事情聴取のようなものを行っているようだ。僕のほかに通報したのは、その人だけだったらしい。それなりに部屋数があるアパートで、通報したのはたった二人なのかと思っただ。他人任せなのか、誤作動だと知っていたか、不思議だった。

名前や年齢、サイレンが鳴り始めたのは何時何分だったかと聞かれた。もし部屋に入られて、浴室を見られたらどうしようかと考えていたけれど、杞憂に終わった。それから、誤作動と確認されたが、このサイレンを止めるスイッチがある部屋には鍵がかかっているようだった。それに、管理会社に連絡がつかないらしく、大家もくるのに一時間かかるらしかった。その部屋をこじ開ければいいのにと話していたが、そういうわけにもいかないようだった。

消防士から「誤作動なので、部屋に戻っていただいても構いません」と言われ、部屋がある四階へ上った。彼とは、部屋の前で別れた。

部屋に戻ると、僕はたまらなく孤独だった。

電気をつけずにいると、自分の感情がこの暗闇に溶けていくのを感じた。どこからも光は入っ

てきていないはずなのに、段ボールの空き箱、机上に置かれた太宰治の文庫が見える。

浴室に置いたままの、練炭の入った七輪と、必死に剥がしたガムテープが心を重くさせた。明日の朝、目覚めた僕が、空しい気持ちで片づけをするだろう。

サイレンはまだ鳴り止みそうになかった。

暗闇で、机の上においたスマホの画面が明るくなった。

『脇山さん、お疲れ様です。夜勤の林です。この頃、明細を確認してらんですけど、どうも勤怠時間をいじられてる気がするんです。シフト表と照らし合わせて、残業の分を考えても、時間がおかしい気がします。脇山さんも前そんなことがあったと——』

途中で読むのを止め、布団の上に放り投げた。

やっと離れられたアルバイトとは、もう関わりたくなかった。ちよろまかされている分を全て足しても、たかだか法律で定められた最低時給だ。一年分かき集めてもせいぜい三万円程度。それを取り戻せるとしても、その労力に金額が見合うと思えなかった。

8

呼び鈴が鳴った。

部屋の明かりをつけて、ドアスコップから確認する。

芦屋だった。

こうして、彼の顔を正面からまじまじと見るのは初めてだった。

ドアを開けると、いかにもコンビニで買ひ物してきたような袋を片手に彼が立っていた。

「俺、明日誕生日だから、ひとりだし、お酒でも飲まないかなって」

「ありがとう。嬉しい」

なんで、もっと早く話しかけなかったのだろう。もっと早く仲良くなりたかった。初めて話して二時間も経ってないけれど、絶対に仲良くなれる。

普通に友達になりたいという気持ちだが、僕を複雑にする。

「アサヒビールだけ大丈夫？」

「大丈夫だよ」

誰かとお酒を飲むのは初めてだった。

二十歳になった記念に、ビールを初めて飲んだことを思い出す。

ちょうど三年前。あの時は苦くて、一口だけ飲んで、そのまま冷蔵庫に入れた。そして、もう一本買ったチューハイをこれなら飲めるとちびちび飲んだ。翌朝、缶に少しだけ残っていた液をもったいないと思って飲んだら、気持ち悪くなって午前中の授業をサボった。

それからは次の日予定がない時に、晩酌するようになった。気付けば、ビールの苦味も気にならなくなって、美味しく飲めるようになっていた。

「脇山くん、太宰と同じ名前と同じ誕生日なんだね」

彼は机に置かれた文庫本を手に取りながら、そう言った。

「オサムじゃなくてハルって読むんだけどね」

「え、そうなの？ かなり珍しいね」

人生で何度目のやり取りだろう。

彼は、文庫本のそでに印字された太宰治のプロフィールを興味深そうに凝視する。

「おさむが入水自殺した場所は今死ねるほどの深さはないらしいよ」

自分の放った自殺という音の響きに胸が苦しくなる。

「脇山くんは、死にたいと思ったことある？」

「ない、かな」

七輪が入っていた段ボールが視界に入り、眼をそらした。

「そうだね。死にたいってどういう気持ちなんだろ」

それは、死にたいなどと思っただけで、ない人間の純粹な疑問に聞こえた。

「人間関係に疲れたとか、借金があって身動きとれなくなったとかじゃないかな」

「それでも、死ぬのは怖いよね」

沈黙が流れる。

缶ビールを開けると、炭酸が抜ける音が部屋に響いた。

「そういえば、今日呼び鈴が鳴って出なかったけど誰だったんだろ」

ひとり言を呟くように言った。

「それたぶん、インターネットサービスの勧誘だよ」

「そうなの？」

「昨日、俺のところに来たよ。夜遅くに鳴ったからドア越しで要件聞いても無視されて、渋々ドア開けたらそうだった」

それも仕事というものなのだろうかと考えて、最終面接に落ちたことを思い出した。

何か喋らなくてはと「この前、大学近くで不審火があったから放火魔かと思った」と笑いながら言うと、「それ捕まったって、ツイッターで流れてたよ」と言われた。

間を埋めるように缶ビールを飲む。

ひとりで飲むよりも早いペースで液体が減っていく。

「脇山くんは就職決まった？」

彼がそう言うと、目が合った。ここまで気づかなかったけど、彼は相手の目を見て話すようだ。僕も目を見て話すように意識すると、彼の瞳の奥に潜む何かに本能がくすぐられた。

「まだ決まってなくて、今日は最終面接落ちて」

唐突な質問には、正直に伝えることしかできなかった。

気まずい空気が部屋の中に充満する。

「芦屋くんは？」

一刻も早く話題を変えたかったが、内定がないことを気にしていると思われなくなかった。

「俺は公務員志望だからまだこれから。でも、この前筆記落ちた」

彼はそう言うと、ビールを体内へ流し込んだ。そして、缶を勢いよく机におくと、乾いた音を

響かせた。それに倣って、僕も飲み干した。

アルコールが回ったせいなのか、何となく怠いような、眠たいような感じがする。

「もう一本ずつあるよ」

彼はそう言って、お気に入りだというポテトチップスも取り出した。袋を開けるパリパリッという音を立てて、彼は「どうぞ」と言いながら、それを食べ始めた。

うす塩味のポテトチップスは、お酒のペースを上げた。

二本目も飲み干し、ずっと眠っていたウイスキーを持ち出した。ウイスキーを氷片に浸したグラスを揺らすと、からりと音がした。一口二口と、少しずつ嘗めた。

「生きるの、辛いな」

アルコールは感情を増幅させる。嬉しい時には嬉しさも倍増するし、辛い時には辛さは大きく膨れ上がる。いつまでありきたりな不幸に影響されているのか。そんな自分を蹴飛ばしたくなるけど、この人生こそが僕を作ってしまった。

「どうしたの？」と、彼が僕を見つめる。

「僕には何もないなって」

僕に棲みついた虚無感が少しずつ発酵するのを感じる。

「そんなことないと思うよ」

「僕には何もない。大学に入って、サークルにも入らなかつたし、ボランティアもしたことない。インターンシップにも行ってない。アルバイトで身についたこともない。趣味は読書くらいで、

面接の場で喋れるほど読んでもない。巷で流れるような音楽も聞いてない。英語も喋れないし、歴史にも詳しくないし、誰かに誇れるスキルも知識もない。資格だって、中学三年の時に取った英検三級しかない。自動車免許もまだ取ってない。働いてまでやりたいこともない。それを見つけたところで、面接が上手くいかない。母子家庭だから、父もいない。しっかり高校まで通わせてもらったのに、もう母とは連絡も取ってない。兄弟もいない。姉妹もいない。友達もいない。恋人もいない。内定もない。お金もない。そう、僕には何も無い。何も無い。何も——」

壮大な自分語りは、喋り始めたら止まらなかった。

喋る言葉に詰まると、僕は酔わなきゃ本音も言えない人間に思えて自己嫌悪に陥った。楽しいお酒の場にしたかったのに、もう引き返せないとこにいる。泣きたかった。涙が出ない代わりに、胸を切るような何かがこみあげてくるのを感じた。

「自殺した太宰よりも必死に生きている俺たちの方がかっこいいよ」

彼はそれだけ言って、笑った。ずっと僕を支配してきた死神が、身体からすとんと抜け落ちていくような、そんな気がした。

サイレンは、やがて聞こえなくなっていた。静かな部屋に降り始めた雨音だけが残った。

らせん階段のカンダタさん

南藻 ナイ

I.

目の前を、ちぎれた蜘蛛の糸が横切っていたとき、いよいよ俺の命運も尽きたか、と思った。ほぼ透明な粘液のきれはしに、金色の光が滴り、美しかったが、横断歩道のむこうにはパトカーが停まり数人の警官が立っていた。人を殺した俺には、あの世からのお迎えと呼んでさしつかえない。難儀なことだった。

とっさに踵を返して走りだしそうになるが、どう考えてもいまさら不自然だった。まあ、いい。みっともないことはすまい。腹を決めたとき、海面で息を吸うように喧騒が止んだ。

交差点の信号が切り替わっていく。塗料のはげた白線に、緑のひかりが映る。サイレン灯が回り、視界がまだらに染まる。

俺は努めてゆっくりと、足を踏み出した。

そのとき、道路にちらばる破片に気づいた。

俺ははじめて、警官たちをまじまじと見つめた。俺になど視線もくれない。白黒の車のかげに、鉄色の普通自動車があった。衝突事故らしい。全面が大きくへこみ、銀紙のように丸まっていた。

ひびわれたフロントガラスには血が付いていた。

俺はうはうはで、横断歩道を渡り切る。運は尽きていなかったらしい。さすがカンダタに恩赦を与えた仏さま、御心の広いことには定評がある。このまま仏教に改宗してもいい。ひゃっほーい。野次馬を装い、あえてじろじろと観察してやった。どのみち地獄に墮ちる予定だ。

信号が点滅をはじめ、数秒しないうちに赤くなった。

ふと、やってきたむかい側をふり返る。黄色く紅葉した街路樹から、蜘蛛の糸が垂れ、風になびいていた。朝日に白くなっている。

母親に抱えられた子どもが、みじかい指をのばしていた。やがて爪のさきに係がくっつく。枝から離れ、光がぶつりと陰った。

幼いころから、くだらない暮らしをしていた。

俺の家には父親がいなかった。母親は朝から飲んだくれ、日々、唇の隙間からよだれと悪口を垂れ流した。ときどき、おまえなんか産まなければよかったと口走り、奇声を発しながら物を投げたりした。あるとき投げられた缶切りは、ガキだった俺のあたまに直撃した。母親は、血だら

けになった俺の服の裾を握りしめ、泣きながら謝ったが、病院には連れていこうとしなかった。ひとり、ティッシュにマキロンを浸み込ませ、なまあたの血液を引き伸ばしながら、俺がなにを思ったか覚えていない。ゴミ箱には紅白のティッシュがあふれた。右眉の上には、ぬらぬらとひかる白い傷跡が残され、消えることはなかった。

どうにか中学校までは通わせてもらえたが、息苦しい毎日だった。どこにいても母親のかけがつきまとい、酒臭い掃き溜めに閉じ込められているような思いがしていた。最後まで、かぞくがどんなものかわからなかったし、理解し合える友人ができたこともなかった。卒業するときになり、俺の家庭環境を不憫に思った担任教師が、寮付きの仕事を紹介してくれた。別れぎわに彼は切実な目をし、君はまだ若い、なんだってできる、と俺の肩を叩いた。その台詞はどこか耳の内を上滑りしてゆきながら、俺の意識の底に沈殿し、折にふれて思い出すこととなった。

なんだってできる。

君は、本当はなんだってできる。

ようやく母親から解放され、俺は全てを自分で決めてきた。

状況に流されることや、他人に言われたように生きることが嫌った。なにかに押し込められそうになれば、そこを逸脱しようとした。

その後、勤めさきの工場で殺人を犯し、逃げだすことになったが、それすらも自分の意思で選び取ったものだという自負があった。不遇な少年時代のせいにする気はなかったし、殺される方が悪いのだと逃げるつもりもない。

その自負さえ守られれば、べつに捕まってもよかった。おそらく二度と出てこれないだろうが、好きに生きて結果だからかまわなかった。

が、せっかく手に入れた自由を、自分から手放す気にはなれない。

朝日に照らされ、眠っていた俺は目を覚ました。

交差点の角に立っているビルに備え付けられた、古い螺旋階段のてっぺんだった。非常階段として、ビルの四階から直接、下に降りるために設置されたように見えるが、突き当たりには壁があるだけでビルへの入り口がみあたらない。かつて、ビルが新しく建て直されたとき、撤去の費用がもったいないという理由で、階段だけが放置されたのだろう。せいぜい展望台にしか使えない、どこにも繋がらない階段だった。

その、最上部のせまいスペースに、俺はうずくまっていた。腹の前には、最低限の荷物を入れたリュックサックを抱えていた。

底に隠した包丁の柄が、あばら骨に当たる。

息を吐き、腕を伸ばす。鉄のてすりに柔い日が当たり、血液のように、粒子がちらちらと輝いていた。朝の冷気のおおさに混じって、錆びた香りが鼻につく。

階段の周囲は目の細かい柵に覆われ、しゃがんでいれば目立つことはない。夜の間のねぐらとして利用してみたが、長いこと丸めていたせいで腰が痛かった。失敗したかもしれねえな、とはやくも後悔する。

立ち上がると、昨日の事故現場がよく見えた。

そのとき、かつん、と足音が鉄柱に響いた。それは人の気配を伴い、ためらわずに上ってくる。ぼろぼろのスニーカーの底から、揺れが全身に伝わる。

まずった、逃げ道がない。舌打ちをする。完全なる行き詰まりだった。

開き直って、いまのうちに悟りをひらこうと座禅を組んだとき、その人物が姿を現した。学生服に身をつつんだ、顔色の悪い少年だった。通学鞆とコンビニの袋を下げている。耳や頬の線がおさなく、まだ中学生に見えた。髪やまつ毛が赤茶に透け、どこことなく、秋田犬に似ている。

彼は、仏像のポーズをとっている俺に気づくと、びくっと肩を跳ねさせ、足を止めた。金属の残響がうすく残ってひろがっていた。一呼吸おいて、「だれたよ」と彼は声を上げる。

II.

「じゃ、おっさん、ホームレスなんだ」

紙パックのカフェオレのストローを口にはさみ、彼は言う。

「で、即身仏になろうとしてたんだ」

「そういう嫌みはどこで覚えてくるんだよ」

「ネット。じっさい、なにしてたの？」

「ふざけてたんだよ」俺はざっくばらんに答える。「おまえは？」

「え？」「おまえはなにしに来てんだ？」

ともかく、不審者として警察に通報されることだけは避けなければならなかった。諸事情により家を失った、かわいそうな大人なので、しばらくここに寝泊まりすることを許してほしいと訴えてみると、彼はおおむね信じてくれたらしい。素直で結構だ。

「べつに。学校行く前に寄っただけ」

彼は目線を逸らし、遠くを見た。親指で紙パックをへこませ、濁った液体を吸い上げる。

「高い所が好きなのか。バカだから」

「解積がひどい。まあ、いいけど」

最上部には場所がないため、彼は教段下の階段にまたがるように立っていた。俺は壁にもたれ、彼を見下ろしていた。

冷えたカフェオレを飲み込み、中学生の少年は寒そうに身を縮める。腕時計をみると、まだ早朝の六時だった。通学途中に、なんとなく寄った、という時間帯ではない。少し興味が湧いた。

「もしかして、毎日来てんの？」

「……うん、まあ」

「わざわざ上ってんだろ？」

少年は、胡乱な目で俺を見た。顔に血の気がない。「おっさん、警察？」

「見えるか？」

「見えない。なにひとつとして見えない」

「そうだろう。そういうことだ」俺は足元の包丁入りリュックを蹴りながら、うなずく。「てか、なわけねーだろ」

「いやさ、彼は手すりから腕を出し、指をさす。「じつは昨日、あそこで交通事故があって、」

「ああ、知ってる知ってる」

「飲酒運転だったらしいんだけど」

「へえ」

「運転手は、『夜中の酒が残っていただけだ』とあくまで否定。ハンドルを切り損ねた理由については、『太陽が眩しかったから』と」

「ムルソーかよ！」と俺は声を上げて笑う。「第一東向きじゃねえだろこの道」

「そう。それでいっばい警察が、」

「いや、でも、それちょっとおもしろいな」

「おもしろくないよ」彼はあくまで真顔だった。「人が跳ねられてんのに」

「……あ、死んだの？」

「いや、死んでないけど」「じゃ、よくね？」

「そういう問題じゃねえっしょ」いまにも吐きそうな声を出す。その青白い横顔を眺め、彼は昨日の朝、ここから事故の瞬間を目撃したのだ、となんとなく悟った。フロントガラスにひきのばされた血痕を思い出した。気分が悪そうだったのはそれか。得心すると同時に、最近のお子さまは繊細なこった、と馬鹿にもしたくなる。俺は口から笑みを消し、深刻な表情をつくった。

「そうだな。極めて遺憾だ」「いろいろ馬鹿にしすぎじゃない？」

少年は飲みかけのカフェオレを置いて、レジ袋から総菜パンを取り出した。半透明のビニルが、海中の生きた膜のようにはためいた。

「それ、朝食？」

「そう」と彼はうなずく。

「半分くれよ」

「嘘だろ、おっさん」と愚痴りながらも彼はパンを割ってくれる。

機嫌よくたまごパンを口につめ込み、ひさしぶりの食事を腹におさめながら、俺はつま先で中学生の背をかるく蹴った。「なあ、明日は焼きそばパン買ってこいよ」

「おっさんのくせに、中学生にたかるのか」「いま二十五さいだよ」

「おっさんじゃねえか」と彼は間髪入れずに言う。

「切ないことをいうんじゃないねえ。まだ青年と呼ばれたい歳ごろなんだ」

適当なことを喋りながら、顎を上げて交差点を見下ろす。道路には走っていく車の数が増え始めていた。遠方には会社の集まるビルが立ち並び、群青がかった光を鋭角的に反射している。それは、まるで街ひとつを取り囲む檻のように見えた。

「おまえ、毎日ここでなにしてんの？」

翌朝も少年は階段を上ってきた。到着するなり、彼は焼きそばパンを俺に投げつけた。包装を

破り、口を開けて頬張ると、べたべたした安っぽいソースの匂いがまとわりつく。やることもないため、俺は暇つぶしに彼に向かって話しかけていた。

少年は鉄柵に肘をつき、液晶に目を落としていた。ずごとと音をさせ、紙パックのストローから唇をはなす。

「べつに。こんな感じでスマホいじってるけど」

「中坊がスマホとは生意気な。おとなしくDSで遊んでやがれ」

「いまどきはみんな持ってるから」彼はうっとうしそうに片耳に指をつっこむ。そこで目に皺を寄せ、こどもっぽい顔になった。「しかも、アイフォーンXR。いいっしょ」

得意げに、手元の端末を見せびらかす。「スマホカバーもいいやつだし。裏側についた蓋を開けると、なんと鏡が」

「女が化粧に使うやつをためえがまちがえて買っただけだろ」

「鋭いな、おっさん」彼はつまらなそうに音を立てて蓋を閉じた。「そのとおりだよ、くそ」

日の光が冷たい壁をあたためていた。ゆっくりと瞬きし、日向の境界が石鹼色に焦げているのを見つめる。ペンキの凹凸に、水のようなうすい影が溜まっていた。

少年は、限のできた目で熱心に画面を眺めていた。親指で液晶板を叩き、口をひらく。

「おっさんはなにしてんだよ」

「おっさんは生きてるんだよ」

「逃げてるんでしょ？　ひと殺して」

俺は、やさしい笑みを浮かべて少年を見た。

「え、なにが？」

彼はスマホの画面をこちらに向けた。「この顔に、ぴんときたら一一〇番」片手で俺の額を指さす。「特徴、右眉の上に傷跡。おっさんじゃねえか」

画面にはニュースサイトのページが開かれていた。俺の顔写真と共に、事件の概要が書かれている。県内の町工場で、役員と従業員とみられる三人の遺体が発見された。いずれも刺殺。警察は監視カメラの映像から、従業員の男性（二十五）による犯行であると断定し、現在行方を追っている。

俺は、いまよりも少しだけ幼い、証明写真に写る俺の目を見つめた。どことなく虚ろで、焦点が合っていない。単にまちがえてレンズからずれた位置を見上げていただけなのだが、うす気味が悪く、まさしく殺人犯の表情にふさわしかった。

「これは、おっさんだな。完全に俺だな」

「……冤罪？ マジでやったの？」

「マジでやったよ。もちろん」

彼は首を動かさず、じっと、俺の足元に転がるリュックサックに視線をやった。意味もないがなんとなく踏みつけ、背後に隠す。

「通報はしてねえよな？」

「してないし、しない」

「英断だ。死にたくねえもん」俺は欠伸をしながらうなずく。「俺も目立ちたくないし。だまっ
てりゃ見逃しといてやるよ」

後頭部で手を組み、俺は壁にもたれて座った。すぐに逃げ出すかと思ったが、彼は数段下に立っ
たまま、動こうとしなかった。

「なんで殺しちゃったの？」

その目に、なにかを期待するような、興味深げな光があるのを見て取り、俺は鼻で笑う。繊細
かつ倫理的な中学生も目の前で起こっていないことに関してはこれだ。

俺は眠気にまかせて目を閉じた。まぶたの裏側に、緑と赤のひかりがばたばたと散っていた。
数秒経つと、視覚にまぎれていた階段の振動やよごれた皮膚の異臭、産毛が空気のゆらぎで倒れ
ていく触感が、あたまのおもてにくっきりと立ちのぼってくる。

「なんでもできることの証明」

「え？」

「いや」俺は言葉を濁す。「むかついたから」担任教師を、思い出していた。

III.

中学生の頃、家にいるのが苦痛で、誰よりもはやく登校していた。早朝の教室から見た景色は
石膏色にかたまり、静まり返っていた。窓枠には靄を薄くかためたような曇りガラスがはめられ、

つねに視界のどこかは濁っていた。

机の上にあぐらをかき、ばらばらと学級文庫をめくって時間を潰した。紙のこすれる音が不自然におおきく、日焼けした紙からは液体糊に似た甘い虫除けの匂いがした。裏表紙には、はがそうと努力したらしき、古本屋の値札シールがそのまま残されていた。

ときどき、担任がのぞきにきては、机に座るなど俺に注意した。たまに、買ってきた本を棚に置いていった。担任は俺の家庭環境がどのようなものか知っていたが、在学中に助けてくれることはなかった。

卒業間近になり、彼はこれまでのみてみぬふりを清算するように、俺のために必死になって住みこみで働ける場所を探してきた。行く当てもなく、今後をなにも考えられなかった俺の代わりに、あらゆる段取りを整えた。卒業当日、彼は俺を呼び出して言った。

「親のことは気にしなくていい。やりたいことをやりなさい」

俺にやりたいことなどなかった。黙っている俺に、彼は、自分は本当は研究者になりたかったのだが父親の意向で教師になった、いまとなってはこれでよかったと納得はしているが、長い時間後悔していたし、一度くらい自分の好きなように生きてみたかった、と淡々と語った。

「その父もこのあいだ死んで、そうしてみると、なんだったんだらうってね。自分の人生は。親父の一生は。人生は」

彼は、そこで言葉を飲んだ。紫の唇の奥で、唾がうごいた。

「君はまだ若い。僕とはちがう。これからいくらでもやり直せる。時間がある、無限の可能性が

ある。家を出て、お金をためて、なんとかなるだろう。若いから、世界は広いから、なんだってできる。君は、本当はなんだってできる」

担任は切実な目で俺をのぞきこんでいた。なにかを託すように俺の肩を握りしめ、叩いた。その言葉はあたまのなかを空虚に通り返ぎ、俺は、どこかとおくの方からおどろくほど冷めたままの自分の心をながめていた。しかし、彼の指の、ぬるく、鈍い感触はいつまでも肩に張り付き、俺の首筋を通る骨にこだました。

俺は幹旋された職場で働きはじめた。母親の顔を見なくて済むのにはせいせいしたが、どうしたって他人と馴染むことはなかった。仕事をこなし、ものを食って寝るだけの日々が続いた。

転機が訪れたのは、働きはじめて二年目のことだった。

いまでは記憶があいまいだが、当時の職場には酷く理不尽な先輩がいた。目下のものにはばかり威張りちらし、切れると物を投げた。その日も派遣のじじいに難癖をつけ、しつこく絡んでいた。周りのだれもが気の毒そうに下を向いていた。俺は苛立ちながら、やはり冷めたまま、無関心を貫いていた。淡々と、自分の仕事をこなし、彼らの傍を通り抜けようとした。

そのとき、ふと、目の前がちらっと熱く光った気がした。

たとえば、いま、こいつを殴ったらどうなるのか。

胸がどきどきした。そんなことはできない。やってはいけない。なぜだ？ クビになるから。生きづらくなるから。暴力はいけないから。だからなんだ？ やろうとした瞬間に、体を固められたり、消されたりするわけではない。ゲームオーバーになることはない。物理法則に反するこ

とではない。この俺が、やろうと思えばできるのだ。俺の意思さえあったなら。

俺を縛っているのはあくまで社会だ。せせこましい人間の道徳と規則。世界は俺になにも強要しない。俺の意思ひとつで、選択肢は無限に広がる。すべては俺が決められる。家も親も関係がない。

俺は、本当はなんだってできる。

そのとき、濁っていた視界が、急にクリアになった。耳の奥でガラスが割れるような破碎音がくしゃくしゃと爆ぜた。瞳孔が開き、視界が広がって、魚眼レンズを通したような世界が現れた。低い天井の蛍光灯は美しく輝き、機械の電源ランプが針状に赤い光を尖らせた。風が吹いたように全身の毛が逆立ち、心臓がうねり、末端の血液が一斉に冷たくなる。

それらが通り過ぎると、からだは軽く、空気がすがすがしく、世界はどこまでも広がった。なるほど、担任が言っていたのはこういうことか。

べつに殴る必要もないのだが、ものは試しだ。俺は近くに置いてあったケトルを握ると、うるさい先輩を殴った。重い音が響き、俺はクビになった。

生活の手段を失い、しかしながら、気分は晴れやかだった。ようやく、本当の意味で自由になれた気がした。どうにでも生きていけると思った。その後、職と住所を転々とし、ちっぽけな中小工場に行きついた。

「不正してたんだよね、その三人。横領着服」

俺に殺された三人は、経理担当の役員ぐるみで、会社の金を使い込んでいた。たまたま、だからと居残っていた俺に話を聞かれるあたり、がばがばのやり方だったらしいが、会社の小ささが露呈を避けさせた。三人はこれを黙っているよう強要し、俺はうなずいた。

「つまり、俺の薄給はそいつらのせいだったってわけだ。で、むかついて」

嘘だった。わりとどうでもよかった。実際、はじめは黙っているつもりでいた。金を流してくれると言われ、それもいいかと思っていた。しかし、話を続けた役員が、スマホを触りながら冗談気味に、「うっかり今夜死んだりしない限り、大丈夫だから」と口にしたとき、気が変わった。たとえば、いま、こいつらを殺したらどうなるのか。思いついてしまったら、実行せずにはいられなかった。俺がなんだってできることを確認し、安心したかった。

帰ったふりをし、給湯室へ向かった。流し台の収納から包丁を取り出し、戻ってくると三人はまだそこにいた。役員の腹に刃を刺し込み、ぼかんとしていた残りの二人の首を切った。見慣れた工場の床に血まみれで倒れた人間は、異物感しがなく、日常のルールから抜け出た感覚に少しだけ心が浮き立った。

そこに、役員がいじっていたスマホが落ちていた。のぞきこむと、妻と思われる人物とLINEで話している画面だった。彼女によると、あおいちゃんがカレーがいいと言ったので白滝はいらないらしい。世界と違って、人間は理不尽だ。俺の中に罪悪感をさがすため、彼の帰りを待つかぞくを想像しようとしてみたが、ぴんとこなかった。この液晶によって、俺はむこう側から隔絶されているのだと知った。

俺はあきらめて荷物をまとめ、夜の間にも逃げ出した。

「……え、それだけ？」

行き止まりの壁にもたれている俺の、一段下に、中学生は立っていた。

「それだけ」

「マジで言ってるの？」彼ははじめて、なにか気持ちの悪いものを見るような目で俺を眺めた。

「マジで言ってるよ。いいからもう行っちゃまえ」

俺がそう言って乱雑に手を振ると、彼はスマホをちらりと確認し、「ほんとだ。やばい」と呟いて階段を駆け下りていった。そういう意味で言ったんじゃないんだがな、とあきれながら、今度こそ俺は眠りについた。

翌日も、彼が階段を上ってきたときはさすがに面食らった。危機感というものがないのだろうか。彼は俺の姿を見つけると、ぼたりと足を止めた。

「あれ、いる！」

「こっちの台詞だ」俺は寒さに鼻をすすりながら、じろじろと中学生を眺めまわす。「大丈夫か、リスクマネジメントはちゃんとしてって、俺のパイセン言ってたぞ。不正のすえに死んだけど」「笑えねー」と彼はほんとうに真顔でつぶやく。「……だって、まあ、いくとこないし」

暗い声に、ちらりと彼の表情をのぞきこんだ。昨日より一段と顔色が悪い。会うたびにやつれていく気がする。

俺がこのこ居残っているのは、少年同様、ほかに居場所がないというのもあるが、どちらかというと中学生一人に怯えるのも癪だからという理由による。結局、本当に警察には通報しなかったらしい。賭けに勝ったとみるべきかどうかはわからなかった。

少年は、昨日よりは若干の距離をとり、コンビニの袋をあさった。遠慮がちに「たべます？」と菓子パンの袋をつまむ。俺は遠慮なくふんだくった。

ストローでカフェオレを吸い上げながら、彼はちらちらと俺を気にしていた。

「ねえ、そのおでこの傷って防御創ってやつ？」

「どこで覚えてくるんだよ、そんな言葉」「ネット」

「防御創の意味知らねえだろ。知ったかすんじゃねえ」俺は吠える。「むかしおふくろに缶切り投げられたんだよ」

「かんきり？」

きょとんとした顔に啞然とする。

「嘘だろ、おまえ」俺は腕を持ち上げ、缶を開けるジェスチャーをした。「あの、缶詰開けるやつだろが」

「いや、わかる。わかるけど、家にあるんだ、そんなの」

「マジかよ。おまえんちどうやって缶詰食ってんだよ」「プルタブついてんじゃん」「いまはだろ。子どもんときは、」言っている途中で気づく。「いや、そうか」

俺は声を落とした。「自分がみるみるうちに旧式の人間になっていくな。知ってるか、アイフォ

ンらだってもとは最新機種だったんだ」

「なにを当たり前のことを」「おまえのXRだってすぐに型落ちするって意味だぞ」

「そのときは」と彼は俺をまっすぐに見た。「機種変するから大丈夫」

それから、かじったパンを飲み込み、口の端を上げる。

「てか、お母さんに投げられたんだ？」

「なんでうれしそうなんだよ」

「僕も僕も」彼は嬉々として制服の腹をめくった。「おふくろじゃなくて親父だけど」

のっぺりした白い肌に、大きな痣が広がっていた。赤や緑の染みは、まぶたの裏側の残像に似ている。「だいぶ前だけど、蹴られてさ、まだ消えねえのほんとクソ」

「ははぁ。お互い苦労しますなぁ」俺はなにを思うべきかわからず、ぼんやりした相槌を打った。

彼は寒かったのか、後悔気味の顔で、いそいそと服をズボンに入れ直していた。

「こしばらくは帰ってこねえから、ちょっとマシなんだけどね」

「おつとめですか」「そうそう」

「ふうん」俺は、額の傷をなでた。「おふくろさんは？」

「ふつう。でも、自分の夫がクソであることに気がつかないマヌケ」

感情のこもらない声で言い捨て、彼は静かになる。ごまかすように、少しおおげさな動作でパンをくわえた。俺はなんとなく遠くを見た。高いビルが冷たく光っている。

彼がここにくるのは、家に居たくないからなのだとわかった。つまり、興味もない学級文庫を

読む中坊の俺みたいなものだ。

その後少年は、明日からテストだからうんざりだとか、これから寒くなるのが嫌だとか、どうでもいいことを喋った。別れ際に彼は、助けを求める犬のような表情で俺を見た。たぶん、殺人犯である俺に、親父を殺してほしいんだろ？となく思う。だから、来たのか？ どうしろというんだ、俺に。仕事人じゃねえんだぞ、と心のなかで吐き捨てる。

階段を回りながら下りていく、彼のやつれ切った背中を見送る。その姿が、中学の俺に重なった。

なんともいえない、雑巾の洗い水のような色の感情が湧いた。ふと、あの担任教師も、いまの俺と同じ気持ちだったのだろうかと思ひやる。つまりは俺の背中を見つめる俺の背中を見つめる俺、と考えてしまい、ひどく落ち着かない気分になった。

仏の手の中をうろろする馬鹿猿を連想し、首を振った。大丈夫だ、俺はなんだってできる、と胸の内でも繰り返す。埃まみれの水が、心臓から漏れてくるような錯覚に襲われた。

その翌日になると、少年はいよいよもって幽鬼のような顔色であらわれた。俺がそれを茶化すと、「徹夜明けだから」と不機嫌そうに返される。

試験前日に徹夜でつめ込む学生。俺かよ、と思ひ、また落ち着かなくなる。なぜだか、いらいらした。

二人とも不機嫌だった。空は朝からうすく曇り、拭いても落とせない汚れが頭上にこびりつい

ていた。どこからか、果物の腐った臭いが漂ってくる。風が冷え込んでいた。

少年は、今日はスマホではなく教科書を広げた。俺は苛立ちにまかせ、邪魔してやろうと思ひ、彼の頭上からのぞきこんだ。

「ほっほう、理科の教科書だあ。今日は理科のテストですか」

「おっさん、うるせえぞ」彼は不機嫌さを隠そうともしない。

「DNAね。らせんくらい漢字で書けよ、だせえな」

「じゃあおっさん書けんのかよ」「無理だけどな」「じゃあ言うな」

唇をへの字にし、彼は不安定な場所ですりすままで広げ、なにごとか書きはじめる。少しあきれた。

「こんなところで。家で勉強しろよ」

「いまは無理。ごたごたしてる」

ぶっきらぼうなひと言に、一瞬でよどんでいた心が醒めた。なんとかしてやりたいような、自分でも意外なほどあまい感情に襲われていた。

「なあ、知ってるか。おまえは、なんだってできるんだよ」

気づくと、俺はそう言っていた。馬鹿のように真剣に、熱っぽく、語っていた。

「好きにしろよ。おまえの好きにしろ。好きなように生きていいんだよ」

親父くらい、自分で殺せ。俺はできなかったが。おまえはいまのうちに。繰り返すな。ここから出て行け。そんなつもりだった。

「無理だって」

少年はそっけない。

俺は自分でも知らないうちに、むきになっていた。

「無理じゃねえ。すべてはおまえの意志なんだよ。ぜんぶおまえの自由だ」

「自由意志なんか」彼はふいに声を尖らせた。「ないから」

教科書から顔を上げ、「ネットの知識だけどさ」と意地の悪い瞳で俺を睨む。

「意識がなにかを決定したと思った0・35秒前に、すでに無意識でそれは決められているんだってさ」

「あ？」

「つまり、『僕』という意識はなにも決められない。ただの傍観者でしかない」

「は？」

「現に、息吸ってんのも心臓動かしてんのも、無意識だから」

俺は黙る。なにか動悸がした。彼は熱に浮かされたように喋りつづけていた。

「そうじゃなくても、自分の頭で考えたことなんてなにひとつないじゃん。CMの影響、ネットの受け売り、名作の焼き直し、食べたものを吐くだけ。ありとあらゆるものに影響されて、それをちょっとずつ空の枠に詰めて、それで自分があるような気になってる。本来、ピリヤードと同じだから。ボールを打ったらあととぜんぶただの反応。意志ではなにひとつ決めてない」

「ふざけんなよ！」

俺は叫んだ。

「そんなわけがあるか。俺はここにいないじゃないか。決めてるのは俺だ。俺がなにも決めないんなら、俺はなんのためにあるんだ」

「行動の評価だね。だから、傍観者って言ってんじゃない」

「うるせえ！ そんなことは訊いてねえよ！」

少年は冷めた目で俺を眺めていた。

「なにされてんの？」

「認められねえつつってんだよ。ぶっ殺すぞ」

「じゃ、殺せば？」彼はせせら笑った。その声には、どうせ無理だろうという侮りが滲んでいた。俺は頭が沸騰し、気づけば、階段を下り、道行く人にぶつかりながら街を早足で歩いていった。リュックの底に包丁が沈みっぱなしであるところを考えると、使ってはいないらしい。

余計な事件を起こさなかったことにひとまずは安堵したが、混乱は消えなかった。

気にしなければいいのだと言い聞かせても、彼の言葉は脳裏にこびりついて離れず、思考を勝手に推し進めていく。そうだ。あの三人を殺そうと決めたのも、役員の言葉がきっかけではなかったか。そもそも、なんでもできることの証明という動機は担任教師の話がもたっている。そして母親の存在が。すべては影響にすぎなかったのだろうか。俺は、ずっと、せまい部屋から出られていなかったのだろうか。

人の意志がもたらなものにも決められないのだとしたら、俺がやってきたことは一体なんだった

のか。

なんだったんだろう、俺の人生は。

自分が呟いた台詞に、心底ぞっとした。俺の背中を見つめる俺の背中を見つめる俺。永遠に繰り返す。同じところを回りつつける。

俺はてのひらにぬるい汗を掻きながら、考える。出ていくには。ここから出ていくには。

あの少年を殺して、連鎖を断ち切る。

これしかないんじゃないか？

IV.

眠る気になれず、俺は夜道を歩いてきた。猛スピードで走る車が、次々と、疲れながら歩く俺を追い抜いていき、まるで俺のからだだけが夜の底に後退していくようだった。

俺はほんの幼いときから、夜は一人で寝ていた。自宅のアパートは車道に面しており、夜中でも車が走った。通り過ぎる車のライトが天井を剥ぐように滑っていくたび、一枚一枚、脱ぎ捨てられた夜の抜けがらに自分が包まれ、世界から隔離されていくような気がしていた。人の気配はひどく遠く、淋しさに押しつぶされながら、自分の意識が透きとおっていくのをただ待っていた。俺はあのころとなにも変わっていないのだと知った。

そのとき、曲がってきたバイクのライトに照らされ、目の前が真っ白に飛んだ。

慌ててとび退く。濁った排気音が遠ざかっていく。近くに立つカーブミラーに、歪んだ自分の姿が映っていた。まるいライトの残像が視界の真ん中に浮かぶ。

リユックの中でごとりと包丁が動き、背骨に当たる。

俺は、ふと顔を上げる。空のふちが水を吸い上げたように白んでいた。なんとなく、すべてがわかった気がした。

そして、俺は決める。

少年はどうせ今日も来るだろう、とは思っていたが、俺の姿を見ると逃げる可能性はあった。階段下で建物のかげに身を隠し、待ち伏せることにする。

やがて、いつもの時刻に少年が現れる。

彼は足を引きずるように、階段を上っていった。がんと金属音が空に響く。

最上部にたどり着いたのを確認し、俺は包丁を握ると、一気に駆け上った。

息を切らし、二段飛ばしに走る。朝日がちかちかかと俺の眼球を焼く。そして、驚いた顔で棒立ちになっている中学生の前に、俺は立ちふさがった。

「よう、クソガキ」

俺は彼の鼻先に包丁を突きつける。

「じゃ、とりあえずスマホ出そうか」

彼は無言で、のろろと制服のポケットに手をつっこみ、素直に端末を差し出した。彼の手は

小刻みに震えていた。わずかに優越感を感じながら、俺は刃を向けたまま、手の中の機械をひたたく。

ひっくり返し、スマホの裏面を確認する。凹みに指を引っ掛けてカバーの蓋を開けると、安っぽい鏡があらわれた。汚い俺の顔が映っている。

俺は力をこめ、蓋をねじ切った。

腕を振りかぶり、鏡を外に投げ落とす。

手すりに身を乗りだし、行方を見守った。鏡のついた蓋は束の間の滞空時間の後、地面に衝突し、粉々に砕けた。ちいさな銀色の飛沫が上がり、川面のようにきらきらと光るのが見えた。

「はい、証拠隠滅完了」俺は包丁の柄を握ったまま、ばたばたと手をはたく。「あとはどこへなりとも行け」

少年は、啞然として地面を見下ろしていた。

「なにが証拠隠滅だよ。むしろ散らばってんじゃない」

「ばれねえだろ、どうせ」「船越英一郎とか来たらどうすんだよ」

「そんなときはあきらめろ。やっぱ、おまえがああ事故を起こしたんだな？」俺は包丁をリュックにしまいながら、確信を持って言う。「で、運転手がおまえの親父」

彼は疲れたようにその場に座りこむ。「嫌がらせのつもりだったんだよ。いや、嫌がらせですらなくて……そんな、走ってる車に、当たるわけないと思ってたし。事故したらおもしろいなどは考えてた。それで、死んでくれないかなって。でも」

彼は毎朝、ここに乗ってスマホをいじっていた。目の前の道路は会社の集まるビル街に続いており、彼の父親も通勤に利用していた。そこで彼は思いつく。スマホカバーについていた鏡を使い、父親の車のフロントガラスに光を当てた。

こどもっぽい、馬鹿馬鹿しい嫌がらせ。そもそも、信号付近とはいえ、走っている車に反射光を当てること自体が敵しい。しかし、何回もやっていたらいつかは成功する。

彼の父親は太陽が眩しかったせいでハンドルを切りそこない、歩行者をはねた。たまたま前日の夜の酒が残っており、そのままおつとめにいくことになった。

「んな気に病む必要ねえだろ。クソだったんじゃねえのか」

「いや、だって、関係ないひとまで巻き込んで。それに、」彼は、女の子のように口元を覆った。「……お母さんが、落ちこんじゃって」

彼は、つらそうに言葉を絞り出した。「親父はさ、お母さんには、ほんとうに優しくかったから。……親思いのいじめっ子、みたいなの。老人に席を譲るモンスタークレーマー、子煩悩の悪代官、おせっかいな殺人犯。なんかもう、そんなことばっかりだから。僕があいつを断罪する権利なんて、どこにもなかったかもしれない」

「いいんだよ、それで。仏さまじゃあねえんだから」

なにがいいのかわからないまま、俺はそう口にする。彼は手を広げ、目元までを覆った。

「だけだすくなくとも、お母さんだとか、ふつうに歩いてただけのあのひととかを、代わりに不幸にする権利はないわけで。だから、おっさんが人殺しだって知ったとき、やっぱり、罪を犯し

たら裁かれるんだ、って安心してた。……どんどん、苦しくなってくる」

少年はうなだれ、頭を抱えた。俺はいつかの助けを乞うような瞳を思い出す。彼が殺してほしかったのは、親父ではなく彼自身だった。彼は膝を抱え、つつぷす。

「クソみたいな人生から、これですこしははみ出したつもりだった。でもだんだん、結局これも、ある意味親父にやらされたことなんじゃないかって気がしてきて。結局、そういうルールをなぞってただけっていうか。どこまでいっても、出ていけない。もうこのまま一生逃げられないのかもしれない。だってクソみたいなことで僕のからだができるんだから」

顔を押しつけ、くぐもった声で彼は「もうどうしていいかわかんねえんだよ」と泣きことを吐いた。

「あのさ、」

俺は唾を飲み込んだ。うづくまる彼の傍にしゃがむ。一晚たち、心は穏やかだった。朝日はあたたかく、頬がぬくもっていた。

「俺はさ、自由意志がどうか、難しいことはわかんねえよ。でも、昨日歩いてて、やっぱり人間はひとりなんだと思ったよ。他人がなに考えてるかわかんねえし、まったく同じ気持ちにはなれない。急に肉じゃがをカレーにしたり、包丁で切りかかって来たりするし、理不尽だし。たぶんもう、俺には一生涯解できないだろう世界っていうのがあって。しかも、生きることに意味なんてないだろ？ だからほんと、ひとりなんだよ」

昇ったばかりの太陽が、となりの壁を焦がしていた。コガネムシの背中のような光沢をまとい、

アスファルトが輝きだす。人の喧騒とエンジンの音が煙のように、眼下にたちこめていた。鳥が羽を広げ、高いビル群の向こうへ飛んでいく。すべての景色がどこか眩しく、あたたかく、ただ、俺はここへは帰っていけないだろうと思えた。もうなにもかもが遠く、手遅れだった。

「でさ、繋がってないってことは、おまえはだれかの一部ではないってことだ。意味がないってことは、おまえに代名詞はないってことなんだよ。おまえはおまえでしかないんだよ。生きるってことに關しては。すげえ純粹なおまえなんだよ。まあ、確かにお前の言う通りなんだよ。おまえはクソ親父の息子だし俺はクソばあおの息子だし、それはもう動かせねえよ。俺は俺だけで生きてるんじゃない。じつは、知らないどっかの誰かの出来損ないみたいな存在かもしれない。人間の中で生きる以上、誰だって自分のためだけに生きてくわけじゃない。だけどそんなの問題にならないくらい、どうせおまえはひとりだから。大丈夫だ」

そう言ってる俺は、いつかしてもらったように、少年の肩を叩いた。だれもしてくれなかったように、ぐしゃぐしゃと彼の頭をなでた。その、指の隙間にとおる髪の毛の感触と、頭のしめった温かさに、かぞくがいたらこんな感じなんだろうと胸が詰まり、それでも、俺はおまえになにかを背負わせる気はないよと言いたくなった。俺は、おまえになにも託さない。だって、俺とおまえはちがう。好きに生きればいい。たとえ、出ていこうとあがいた末に、同じことの繰り返しになったとしても。

「だからまあ、俺はもうちょっと逃げるよ」

俺は彼の頭から、そっと手を放した。冷たい風が水のように荒れた手を洗った。抜けた彼の髪

の毛が、指の合間からふわりと漂う。

細い髪の本は、まるで切れた糸のようにもみえ、端からは金色の光が滴り、それは美しい。

「おまえは？」

俺が尋ねると、彼はゆっくりと顔を上げた。睨むようなその目は真っ赤に充血し、潤んでいた。

「……僕は、通報するよ」

「好きにしろよ」と俺は笑う。そして俺は階段を下りた。

(理学部理学科二年)

東光原文学賞総評

選考委員長 跡上 史郎

一次審査を通った今年の応募作を一通り読んでみて、全体的に技術が向上してきているのを感じた。荒削りな若い才能の爆発とか、自らの思いの丈を原稿用紙に叩きつけるとかいったかつての文学観が変化してきているのかもしれない。応募者たちにとっての文学とは、まず視点や情報の限定によって謎を生じさせ、読者の興味を惹きつけたり伏線を回収したりするプロットの構築のことであり、いかにもこれからAが起きますよと仄かしておいて、実際にはBが生じることの落差で読者を揺さぶるミスディレクションの技法のことだったりするらしいのである。勉強や努力や練習が必要だという当たり前のことが当たり前に行われる時代になりつつあるのだとすれば、それはそれで結構なことと言えよう。

「らせん階段のカンダタさん」（優秀賞）は、芥川龍之介を踏まえながら、ミステリー的な構成で読者をどきどきさせる技量を示している。「おさむじゃない」（優秀賞）は、太宰治を念頭においているが、LGBTの悩みがその他の日常的な諸々の中に溶け込んでいるある種の「軽さ」に、性同一性障害当事者の受賞が話題を呼んだ一九九九年度下半期芥川賞を彷彿させるものがあつた。

「奇妙なティータイム」（優秀賞）は、くだけた語り口調がサリンジャーを想起させるものとして好評価で、実際に作者が楽しんで書いている様子が伝わってくるような生き生きした文章は玄人跼である。

大賞の「姉妹」は、なによりも文章の上質さに唸った。そして、普通人の妹を語り手にしてエキセントリックな姉を眺めたのが上手い。世間の基準から外れていった果てに死んでしまった姉は、姉が書物に埋没しているという妹の思い込みからも外れてしまっていて、別のものにのめり込んでいた痕跡を残す。普通の側にいたはずの妹が最後に気づいた自分自身の姿は、文学でなければ描けない鮮烈なものだ。

二〇二〇年の今年、人工美の極致を示した三島由紀夫の没後五十年である。受賞者の面々は才気あふれる若人たちであるが、十六歳ですでに作家として完成していた三島は早熟の天才としてまた別格であろう。技術の大切さを自覚するようになった若き書き手たちは、三島は意識すべき存在と心得たが良い。

一方でそこには、人工の美を追求することばかり捕われてしまうことの危険もまた潜んでいる。自衛隊での剖腹死を遂げた三島を、ギリシア神話で太陽を指しながらも墜落死したイカロスに喩えたのは、三島の盟友、澁澤龍彦であった。渋沢栄一で有名な澁澤一族の中でも龍彦は榮一よりさらに宗主筋に当たるが、三島のような早熟の天才ではなかった。しかし、死後三十年以上を経過した現在も新たな読者を獲得し続けており、三島より早く『文豪ストレイドッグス』にも登場している。イカロス三島に対して、澁澤が自らをもって任じていたのはダイダロスである。

迷宮の制作者にしてそこから脱出するための人工の翼をも作ったこのイカロスの父は、息子のうに太陽まで近づくことはせず、適当なところで地上に降り立ち、生き続ける。澁澤もまた三島のようなことをするという周囲の心配を笑い飛ばし、咽頭癌に冒されながらも最期まで生きる希望を失わず、大傑作『高丘親王航海記』を遺した。

技術の向上を目指す人工美の徒よ、三島没後五十年を機に、三島の非業の死に学んだに違いな、工人ダイダロスの手技からもまた学んでみてはどうだろう。イカロスになるには大天才でなければならぬし命懸けだが、ダイダロスならば努力次第で近づけるかもしれないのだ。

● 跡上史郎（あとがみ・しろう）

熊本大学大学院人文社会科学部（文学系）准教授。専門は日本近・現代文学。

熊本文学隊代表世話人として「いま石牟礼道子をよむ・リヴィア・モネ×多和田葉子×伊藤比呂美」（二〇一九・一一・九、於 Darkikan）の企画・運営等。

その他「澁澤龍彦『高丘親王航海記』から見る三島由紀夫『豊饒の海』（『三島由紀夫研究』[18]、二〇一八）、「はじめての村上春樹 最新長編『騎士団長殺し』と熊本」『KUNAMOTO』[24]、二〇一八）、「かひがひしからぬ『諸君』——世界模型としての村上春樹『騎士団長殺し』——」（『近代文学試論』[54]、二〇一八）等。

講評　まだ見ぬ自己に出会うこと

選考委員　永尾　　悟

第十二回東光原文学賞の応募作品は、家族、友情、生と死など様々な主題を扱っていたが、作者がそれぞれ考える主題を、個性ある言葉で表現しようとする意欲に満ちたものが多くを占めていた。作者の想像が抽象性を帯びるほど言語化する作業は難しくなっていくものだが、その困難さにまっすぐに挑んだ経験は、言葉によって成り立つ社会を生き抜くための糧になるだろう。ふとした思いつきを短い言葉でさらりと表現し、時に深刻な誤解や対立を引き起こす今日において、じっくり丁寧に言葉を紡いで一貫性のある物語を作り上げることは大きな意味を持ちうる。入賞した四作品は、言葉に向き合う真摯な姿勢がとりわけ顕著であり、作品世界との接点を共有しない読者からも何らかの共感を引き出す可能性を持っていたように思う。

大賞作の「姉妹」は、語り手の「私」が姉のキョウちゃんの不思議な存在を通して新たな自己認識へと至る物語である。近くて遠い他者との関係から隠された自己を見出すという主題を、幼少期から青年期に至るまでのいくつかの逸話によって鮮やかに描き出しているところに作者の筆力が感じられた。それぞれの逸話がコンパクトにまとめられて読みやすいが、やや急ぎ足で展

開する後半部はもう少しボリュームをもたせても良かったように思う。しかしながら、姉についての語りが「私」自身の物語へと移行していく過程は自然であり、結末まで程よい緊張感が保たれていたことは高く評価できる。短いながらも奥行きのある作品であるため、工夫次第では長編小説にも発展させられるかもしれない。

入賞作である「おさむじゃない」は、男子大学生の日常の葛藤を、過去の回想を織り交ぜつつ描いた物語である。語り手の治はらは、抑圧された感情によって強い疎外感に苦しみ、一度は生きる希望を見失うが、身近な人間との接点に気づいて救いを見出す。感受性が強く独りよがりな語り手の視点が物語全体で効果的に用いられており、大学生の些細な日常を彩りある言葉で豊かに描写していたところは評価したい。高校時代の苦い恋愛経験の回想は、語り手のアイデンティティに関わる要素であるはずだが、物語全体に上手く接続されていない点は勿体なかったように思う。しかし、物語の構成やモチーフなど随所に工夫がなされており、作者が時間をかけて構想から執筆を行った痕跡が読み取れた。

受賞四作品に共通した主題は他者との出会いである。「姉妹」は「私」が姉の人生と出会う物語であり、「おさむじゃない」の治は語り合える友との出会いを経験する。それ以外の入賞作である「奇妙なティータイム」と「らせん階段のカンダタさん」は、語り手とは全く接点がなさそうな人物との偶然の出会いから物語が動き出していく。すべてが一人称で語られるこれらの作品において、語り手たちは、他者との邂逅から新しい自己との対峙を経験する。ごく当たり前のように見える私という存在が、不安定で得体の知れないものでありながら、何か大きな可能性を秘

めていることが暗示される。

語り手たちが認識する新たな自己の可能性は、一人称の語りを通して物語を書く行為にも通じるものである。架空の「私」が語る物語は、作者の自己が不可避にも投影されると同時に、そこから切り離された自己が立ち現れる場所である。これによって、たとえ作者にとってごく身近で私的な物事を描いていても、日常性を超えた視点からそれらをとらえることが可能になる。いつもとは異なる自己の立ち位置を確保し、新たな自分の世界観にめぐり合うこと、これこそが物語を書くことに特有の体験ではないだろうか。アメリカの作家リチャード・ライトは、「私」という視点で物語を書くことは「まだ見ぬ自己に出会うこと」だと述べた。この文学的想像力こそ現実を生きる力へとつながるはずだ。

● 永尾 悟（ながお・さとる）

熊本大学大学院人文社会科学部（文学系）准教授。専門は二〇世紀アメリカ文学。

主な近著（共著）として、『アメリカン・モダニズムと大衆文学』（金星堂、二〇一九年）、

『ホワイトネスとアメリカ文学』（開文社、二〇一六年）などがある。

講評 現実の世界が深くなる

選考委員 岩瀬 茂美

作家の川上弘美さんは「どうして詩人は詩を書くことができるのだろう、と、しんそ不思議に思う」と語る。何もない場所から、言葉を選び、削り、かたちをつくってゆくことが、どうして詩人にはできるのだろうか」と。

例えば、谷川俊太郎さんの「夜のミッキー・マウスは／昼間より難解だ」という始まりに、どきどきする。「あのひとが来て／長くて短い夢のような一日が始まった」。そんな一節に、誰かを恋い焦がれたくなってしまふ。それがひどく恐ろしいことだと、よく知っているくせに。川上さんは「詩人は、世界をつくる。わたしが見たこともない世界を。わたしがものすごくよく知っている世界を。その両方を併せもつ世界を」と続ける。

小説を読んで、同じような体験をした人は少なくないだろう。小説が描く世界が、小説が提示する新しい発見が、自分の人生とも重なり、その後、現実の世界がより深く見えるようになる。そんな新しい発見探しが、この文学賞の選考委員を務める最大の楽しみだ。今回で四回目になる。新しい才能に出会えること、過去の受賞者が新たな作風でチャレンジしてくれることも、う

らしい。

悩みながらの選考だが、自分なりにいくつかの基準を設ける。新しさを感じるか、文章に熱量があるか、文体や物語の完成度はどうか、作品が提示する世界観は魅力的なのか。入賞した四作品にはそれぞれ、いくつかの特徴があった。美しい文体であること、映像が浮かぶようなイメージ喚起力があること、構成がしっかりしていること、時代性があること、リアルであること――などだ。大賞「姉妹」は、全編を貫く静謐で美しい文章に驚かされる。あこがれの姉を妹の視点から淡々と描き、その存在感が少しずつかたちを結んでいく。最後の音楽への展開が唐突だが、完結した世界を描ききる力量を感じた。

優秀賞「奇妙なティータイム」は、話がころころと転がる饒舌な文体で、不思議な世界観を広げていく。風変わりな女と出会うだけの話なのに、ふくらみがある。短編ながら、その「続き」を予感させる作品の深度がある。

優秀賞「らせん階段のカンダタさん」は、物語の完成度が高い。らせん階段という象徴的な場面設定を軸に、会話主体の構成で巧みに物語を展開する。読みやすく、映像的な文章でもある。

優秀賞「おさむじゃない」は、黒髪キャンパス周辺の風景が浮かぶようなリアルがある。LGBTなど時代性も感じさせ、等身大の会話もいい。心理への切り込みをもう少し深めたい。

このほか、今村夏子ワールドのような不穏な手触りの「透明人間に殺される」、実験的作風の「偶像に捧ぐ」も印象に残った。

今回も力作がそろい、作品の中には、書き手の切実な「芯」のようなものを感じた。それぞれ

の書き手が作品を深める過程で、新しい発見があったことだろう。

雑誌「暮しの手帖」の編集長だった松浦弥太郎さんは、何か知りたいことがあった場合、インターネットでの情報収集と、現地での聞き取りをすることの両方があって、はじめて確かなものに触れることができる、と語っている。そこで、必要なのは「望遠鏡と虫めがね」。望遠鏡で眺めて探して、現地に出向き、虫めがねでよくのぞく。「これではじめて知りたいことのほんとうがわかり、本質の発見が生まれる」という。

小説の場合はどうだろう。世界で起きていることを望遠鏡で眺めながら、虫めがねでも見つめてみる。さらに、自分の内側にどこまで深く迫ることができるのか、が問われそうだ。そうして見つけたことが、獲得した物語だけが、読者の世界を開き、いつまでも心に残るのだろう。おそらく、書き手の人生もより深いものに変えていくことになる。

● 岩瀬茂美（いわせ・しげみ）

熊本日日新聞社編集局次長。一九六三年、八代市生まれ。一九八八年、熊本日日新聞社入社。社会部、天草総局、編集本部、荒尾支局などを経て、二〇〇七年編集本部次長、二〇一一年社会部次長、二〇一二年同次長兼論説委員。二〇一四年文化生活部次長兼論説委員、二〇一七年編集委員兼論説委員、二〇一九年地方部長兼論説委員。二〇二〇年三月から現職。主な連載企画に「水俣病40年」「水俣病小史」「水俣病は終わっていない」（平和・協同ジャーナリスト基金賞特別賞）、「30代の地図」「熊本地震 連鎖の衝撃」「熊本地震 あの時何が」など。

第十二回熊本大学東光文学賞作品集

発行日 二〇二〇年三月三十一日

編集・発行

熊本大学附属図書館

〒八六〇―八五五五

熊本県熊本市中央区

黒髪二―四〇―一

印刷

株式会社かもめ印刷



To Mr. Soseki

